

第四章 平成二三年の長浜曳山祭

第一節 平成二三年の長浜曳山祭の芸能

長浜曳山祭は四月九日から一七日にかけておこなわれる。さらに、平成一二年一〇月に曳山博物館が開館してからは、曳山祭に先立って四月の第一土曜日に曳山交替式がおこなわれる。

ここでは、曳山祭の諸行事および曳山交替式のうち、曳山狂言とシャギリに関する事柄を中心に見ていく。

第一項 曳山交替式

曳山交替式は例年四月の第一土曜日に長浜市曳山博物館でおこなわれる展示替えである。平成二三年は四月二日におこなわれた。曳山博物館では出番山の四基が収納展示されており、午前中に山飾りをした出番山四基が博物館から出され、午後に翌年の出番山四基が収納される。

博物館を出た曳山はシャギリが演奏されるなか、各町内の山蔵に収納される。ここでは諫鼓山を例に曳山交替式の様子を見ていく。

【諫鼓山（御堂前組）】

山曳きには諫鼓山の中老・若い衆のほかには翁山・鳳凰山からも応援が来た。曳山の亭や曳山の後ろで囃子方が「御遣り」を演奏するなか、曳山博物館から山蔵まで曳行する。曳山が山蔵に納められると、囃子方は「奉演間」を演奏する。道中、舞台後見はずっと曳山の舞台に座り続ける。

調査日	場所	時間	内容
平成二三年四月二日	曳山博物館	9:45	ハッピー（山曳き用のハッピーはカンバンともよばれる）を着た諫鼓山の中老約一〇人が曳山博物館の広場に集まり、展示室内の曳山を曳き出す準備をする。負担人は紋付羽織袴である。曳山に先立って歩く人・行事はシルバー人材センターに依頼した。笠をかぶり、金棒を持ち茶色のハッピーを着ている。
9:49			中老は曳山の下に敷いている板（コンパネ）をはずして曳山を下ろした状態にする。展示中は車輪保護のために負担がかからないよう曳山を上げている。ターンテーブル、コンプレッサーを使い、空気圧で曳山を浮かせて向きをかける。
9:58			囃子方が約一五人到着する。背中に笛を挿している人もいる。囃子方の赤いハッピーを着ている。
10:06			諫鼓山の若い衆が来る。若い衆のハッピーではなく、山曳き用の青いハッピーを着ている。
10:12			翁山・鳳凰山の人たちが山曳きの応援に来る。諫鼓山のハッピーを着ている。曳山の前輪はストッパーで止められている。
10:15			紋付袴を着た舞台後見二人が曳山の舞台上に座る。
10:34			山曳きが五〇人ほど集まる。
10:49			曳山の前に付いている綱が伸ばされ、囃子方は「御遣り」を演奏し始める。囃子方は曳山の周りと亭（曳山の二階部分）とに分かれてシャギリをする。亭に上がる囃子方の靴は曳山の後部下段に積まれている。
10:50			曳山が展示収納戸から曳き出される。
11:03			アーケードなどに当たらないように、亭の後ろにある幟から剣をはずす。

曳山交替式参与観察表（諫鼓山）

12:00	11:55	11:54	11:52	11:43	11:33	11:29	11:24	11:18	11:12	11:11	11:08	11:06				
役者が経験を積むために曳山の舞台上がる。	シャギリが終了する。太鼓などを撤収する。	間」にかわる。	曳山が山蔵にすべて入る。曳山が蔵に入ってもシャギリは続く。	後ろ向きで曳山を山蔵に入れる。地面に水を撒き、車輪を滑りやすくする。	は続く。扉のかんぬきがはずされる。	山蔵前に到着し休憩する。稽古場前には警備員がいる。休憩中もシャギリ	「ゆう壱番街御堂前」の表示がある十字路付近で、道路標示と軽く接触する。	曳山の後ろに入る囃子方と曳山とはつかず離れずの距離を保ち、自由に曳山の後ろを歩いている。	人が乗って、前方を浮かせて方向転換しやすくする。	を敷く。曳山を曲げるとき、曳山の下山後方についている、梶をとる棒に数人が乗って、前方を浮かせて方向転換しやすくする。	ケードの店や軒先のぎりぎりをおとっていく。	曳山の左前と隣接する店の屋根の瓦が接触し、瓦が少し欠けた。曳山はアーケードの店や軒先のぎりぎりをおとっていく。	の部分に縄を巻きつけ方向転換する。	大手門通りと博物館通りの交差点に到着すると右折するために、曳山の前	曳山博物館の広場から出るために方向転換する。	再び動き出す。



曳山交替式（諫鼓山） 曳山博物館から出される（平成 23 年 4 月 2 日 10:42 撮影）



曳山交替式（諫鼓山） 移動中の曳山と後ろにいる囃子方（平成 23 年 4 月 2 日 11:11 撮影）

12:26	12:24	12:23	12:21	12:14	12:04
完全に施錠完了。	山蔵内の最終点検。 向かって右側の出入口は三重になっている。セキュリティが入っていて、異常があると警報が鳴るようになってい	山蔵前扉施錠完了。	蔵の扉が閉められる。	町内の日吉神社の祭りで使う神輿が蔵の向かって右側にしまわれる。	曳山の舞台に狂言で使う台が置かれる。

第二項 線香番

線香番は四月九日に總當番が狂言時間を計る行事である。一八時から、總當番の委員長を除く一二人が、三人ずつ四組に分かれて順次各稽古場へ出向いて時間を計る。かつては線香を焚いて時間を計っていたが、現在では時計を用いて時間を計る。なお、月宮殿では形式的に現在でも線香を焚いている。狂言時間は出笛を含めて四〇分以内とされている。春日山に總當番が一八時に到着し、狂言が一八時二〇分に開始する。その後月宮殿・諫鼓山・青海山の順に一五分ずつ遅れて總當番が出向き、狂言が開始される。また、線香番には役者激励として、長浜市長・長浜市教育長・長浜観光協会会長・長浜曳山文化協合理事長・長浜曳山祭協賛会会長・總當番委員長が各稽古場へ慰問にまわる。

なお、この日から稽古場は一般公開される。また、線香番では各山組でつけられた外題を書いた外題板（サンガケともよばれる）を稽古舞台に掲げることになっている。

【春日山（本町組）】

線香番は春日会館の二階にある稽古場でおこなわれる。一八時に總當番が到着し、副筆頭などが提灯を持って出迎えた。二階に上がってきた總當番に負担人・筆頭が扇子を前に置いて挨拶した。一八時一七分、若い衆から合図を受けて囃子方が「奉演間」を始める。一八時二〇分、狂言開始時間になり、若い衆の合図で小学生の女子が「出笛」を吹いた。「出笛」が終わると、若い衆は「よくできました」という声を上げ拍手をした。その後舞台方が口上を述べ狂言が始まった。途中一八時二五分頃市長らが役者激励に来て、一〇分程で退室した。狂言が終わると、

拍子木が叩かれ拍手が起こった。そして囃子方は「神楽」を演奏する。一八時五八分、總當番は負担人に挨拶をして退室する。

この日から稽古場に女性が入れるようになり、役者の母親らが狂言を見にきている。役者は線香番用の衣装を着る。負担人・筆頭・副筆頭は着流しに羽織、ほかの若い衆は平服にハッピを羽織っている。

【月宮殿（田町組）】

線香番は田町会館の稽古場でおこなわれる。線香番開始前から会館外のスピーカーからテープで「獅子」が流される。一八時過ぎに總當番が到着し、囃子方が「獅子」を演奏し始めた。その後、一八時一四分から「ナナシ」を演奏した。一八時三四分副筆頭が線香を着火し、囃子方は「出笛」を演奏する。「出笛」が終わると狂言が始まる。狂言終了後は「獅子」を演奏する。

役者の衣装は、稽古用の着物である。筆頭・副筆頭・負担人・副負担人は着流しに羽織、ほかの若い衆は平服にハッピを羽織る。三役はいずれも着物姿である。

【青海山（北町組）】

線香番は相生会議所の稽古場でおこなわれる。一八時三五分に總當番が三人到着し、負担人が挨拶をした。一八時四〇分役者が總當番に「よろしく願います」と挨拶をし、一八時四三分囃子部が「豊公楽」を演奏し始めた。一八時四六分舞台方が舞台上で外題・三役などの口上を述べる。一九時五分頃囃子方が「太平楽」・「出笛」の順に演奏し、舞台後見がツケを打ち、狂言が始まった。上演中一九時二五分市長らが激励に来た。一九時四〇分に狂言が終了すると、再びシャギリが鳴

り始める。總當番は手持ちの時計で時間を確認し記録する。總當番の記録に負担人が署名する。

【諫鼓山（御堂前組）】

線香番は御堂前町家二階の稽古場でおこなわれる。一八時半に總當番が着席し、一八時五〇分に狂言が開始された。狂言が始まる前に囃子方が「奉演間」・「出笛」の順に演奏する。狂言終了後「神楽」を演奏する。一八時五〇分頃市長らが役者激励に來た。總當番や市長らが入退室する際には、負担人と筆頭が扇子を膝の前に置いて挨拶する。また、町家の出入り口でも直前筆頭や副筆頭、そのほか数名の若い衆が提灯を持って見送りをしたり車の誘導をおこなう。なお、線香番には役者親や町内の人も見にくる。

役者の服は稽古着で、負担人・筆頭の服装は着流しに羽織である。そのほかの若い衆は平服にハッピを羽織っている。

囃子方には鳳凰山の囃子方も応援に來た。諫鼓山の囃子方含め約二三人である。稽古舞台の横だけでなく町家の外でもシャギリが鳴らされた。外にいる囃子方は、稽古場内から聞こえてくるシャギリに合わせて演奏した。

調査日		場所		時間	内容
平成二三年四月九日		田町会館			
17:25	田町会館外のスピーカーからハヤシが流れている。 筆頭をはじめ若い衆が多数集まっている。会館の外には囃子方の子どもたちが集まっている。				
17:50	会館内には来客用の模様の入った座布団が舞台正面に九枚敷かれている。座布団の前には粗品と、月宮殿パンフレット、菓子の包みが一つずつ置かれる。隣の部屋には無地の座布団が一、二枚敷かれる。こちらには粗品などは置かれない。舞台前に線香が置かれる。				
17:51	振付と役者・小舞台は舞台左手前の部屋に座る。				
17:57	振付は順番に役者の着物を直す。ほかの役者たちは役者方の若い衆と雑談をする。その後、役者と振付は舞台裏へ移動する。				
18:06	会館の玄関には田町の紋と「月宮殿」と字が入った提灯が五つ、田町の紋が青い提灯が三つと赤い提灯が二つ、さらに「負担人」と書かれた提灯が二つ置かれている。会館の周囲には二〇人以上の見学者が集まっている。				
18:11	着流しに羽織姿の總當番が三人入室し、負担人・副負担人・筆頭に挨拶する。その後、最前列に座る。				
18:15	囃子方が舞台裏で「獅子」の演奏を始める。				
18:31	その後、一〇人程度の来客がある。中高年の男性・女性が多いが、子ども連れの家族もいる。来客は無地の座布団や床、縁側に座る。 囃子方「ナナシ」を演奏する。				

線香番参与観察表（月宮殿）



線香番（春日山） 總當番の出仕を出迎える（平成 23 年 4 月 9 日撮影）



線香番（春日山） 囃子方（平成 23 年 4 月 9 日 18:56 撮影）



線香番（月宮殿） 形式的に焚く線香（平成 23 年 4 月 9 日 17:43 撮影）



線香番（諫鼓山） 總當番を見送る（平成 23 年 4 月 9 日 19:33 撮影）

19:15	18:55	18:45 頃～	18:34
最後に負担人が振付に対して挨拶をする。	来賓が二人ずつ、負担人・副負担人・筆頭に挨拶して退室する。振付は狂言中舞台裏で指導をしている。最後の立ちまわりの場面で若い衆による太鼓や笛が初めて入る。狂言が終了する。八重桐役を中心に礼をする。囃子方が舞台裏で「獅子」を演奏する。来客は少しずつ退室する。退室する来客を玄関の外にいる若い衆が提灯を持って送り出す。總當番は負担人・副負担人・筆頭に挨拶し、書類にサインをして退出する。	副筆頭が線香に着火する。囃子方は「出笛」を演奏する。その後、狂言が開始される。 長浜市長・長浜市教育長・長浜観光協会会長・長浜曳山文化協会理事長・長浜曳山祭協賛会会長・總當番委員長などが役者激励のために入室する。それぞれが負担人・副負担人・筆頭に挨拶をする。 窓の外では若い衆や町内の人二〇人くらいが窓越しになかの様子を見ている。	



線香番（諫鼓山） 總當番が時間を計るなか、狂言執行される（平成 23 年 4 月 9 日 18:41 撮影）



線香番（月宮殿） 町内の人が見にくる（平成 23 年 4 月 9 日 18:45 撮影）

第三項 裸参り

裸参りは、曳山狂言奉納の順番と子ども役者の健康、そして祭りの無事を祈って、四月九日から一二日にかけて、出番山の若い衆によっておこなわれる。四日間毎日おこなうかどうかは山組で判断される。天候の悪いときには、着物を着て羽織参りをおこなうこともある。

狂言の稽古が終わると、若い衆が各山組の会所などに集まり、裸参りの装束に着替え、若い衆から選ばれた籤取人を中心にして出発前の酒盛りをする。午後八時頃若い衆筆頭の先導のもと、若い衆は隊列をつくり、大手門通り、宮町通りを経て長濱八幡宮（以下、八幡宮とする）へ向かう。八幡宮参拝が終わると豊国神社へ向かう。道中では暇番山の人が迎え水として裸参りをする若い衆に水を掛けたり、酒を振舞うこともある。またほかの山組の裸参りとすれ違う際は氣勢が上がり、ぶつかり合うこともある。自町へ帰ってくると、三役の宿や各役者の家へ激励にまわる。裸参りが終わると、会所などで役者親などから食事が振舞われる。裸参りでは、隊列は左側通行とし参拝往路優先となっている。また、拡声器や鳴り物は使わないなどの決まりがある。

昭和五一年からは、一二日夜に、長浜曳山祭囃子保存会の行事として、裸参りの迎えシャギリが大手門通りでおこなわれるようになったが、平成二三年は東日本大震災による自粛で、大手門通り・宮町通りに面する山組以外は、基本的に大手門通りでの迎えシャギリは実施せず、「ヨイサ、ヨイサ」の掛け声のみであった。



裸参り（諫鼓山）囃子方が出発を見送る（平成23年4月10日18:47撮影）



裸参り（諫鼓山）出発前（平成23年4月10日18:20撮影）



裸参り（月宮殿）八幡宮の井戸で身を清める（平成23年4月9日21:02撮影）



裸参り（月宮殿）大手門通りにて（平成23年4月12日21:03撮影）



裸参り（春日山）着流しにハッピー姿で八幡宮での参拝（平成23年4月9日 21:15 撮影）



裸参り（月宮殿）接待（振舞い）（平成23年4月9日 21:48 撮影）



裸参り（萬歳樓）迎えシャギリ（平成23年4月12日 21:26 撮影）



裸参り（諫鼓山）役者・御幣使など子どもを激励する（平成23年4月10日 19:54 撮影）

第四項 起し太鼓

起し太鼓は一日と一五日の早朝に御幣迎えと朝渡りがあるため、未明に若い衆や祭礼関係者を起こしてまわるという目的がある。そのため日付が変わってから開始し、朝方までする山組もあるが、多くの山組では一二日の二、三時頃から開始し翌日三時頃には終える。一五日に起し太鼓をしている山組は少ない。起し太鼓は、出番山・暇番山ともにおこなう。ここでは調査をおこなった七つの山組を紹介する。

参加者は若い衆が中心である。一部高校生以下の参加も見られるが、深夜におよぶため、日付が変わる前に帰宅させる山組が多い。また、女性が参加する山組もある。

当日は各山組の会所に集まり、シャギリヤタイ（シャギリマルとも呼ばれる小型の曳山）に太鼓を載せ、演奏しながら町内を練りあるく。道中ほかの山組の会所に挨拶に行き、お酒などが振舞われることもある。お世話になった家の前に行って演奏したり、戸を叩く山組もある。

一晚のうちに二、三回町内などをまわる山組が多く、その合間に会所で飲食をしたり、仮眠を取ったりする。

道中演奏する曲目には、「起し太鼓」・「別嬪」・「桜囃子」・「菊囃子」などがある。起し太鼓の曲は囃子保存会が組織される以前より各山組によって伝承されていたため、独自の曲が残っている。

なお、調査年度は東日本大震災による自粛のため、總當番から起し太鼓は自町のみでおこなうよう要請があり、例年と異なる起し太鼓をしている山組もあった。

【月宮殿（田町組）】

囃子方総責と高校生、大学生の囃子方が中心となりおこなわれる。小学生も途中まで参加する。一日と一五日の二日間おこなう。一日は会合のあと、三山連合（曳山の協力関係にある月宮殿と狸丸と萬歳樓）のほかの山組をまわった。飲食やほかの山組の接待をし、最後に自町のみまわる。一五日は〇時に八幡宮で山番（曳山の警備）をしている中老に差し入れにいき、そのあと会館に戻り飲食をし、自町のみをまわった。両日とも日付が変わってから始め、四時半頃までおこなった。

時間	内容
0:01	囃子方総責（囃子方のリーダー）が田町会館に来る。
0:20	負担人が来て囃子方総責に祝儀を渡す。その後、中老、副負担人からも祝儀。寿司・オードブル・ビール・お茶・ジュースを用意する。
0:30	筆頭・囃子方の子どもたちや大学生が田町会館に来る。
0:45	起し太鼓の会合が始まる。囃子方総責が司会をして、負担人と筆頭が囃子方へ挨拶をする。
1:25	田町会館前を出発する。筆頭と囃子方総責が一番前を歩き手には提灯を持つ。負担人・副負担人・中老は残る。シャギリマルの曳き手は二人で、それ以外も合わせると囃子方は計十二人である。「起し太鼓」を演奏しつつ練り歩く。
1:29	船町会館に到着する。狸丸の山組の人より月宮殿全員が接待を受ける。お茶やお酒を飲みつつ狸丸の人たちと談笑している。

起し太鼓（4月13日）参与観察表（月宮殿）

4:05	2:47	2:12	1:50	1:39
終了は四時半頃であった。	常磐山が田町会館に到着する。シャギリが聞こえてくると会館内にいた人たちが外へ出て迎える。筆頭が挨拶をする。また、酒・サキイカなどを振舞う。	田町会館前に到着する。中老・若い衆・囃子方が何人か待機している。囃子方たちが太鼓、提灯を会館内へしもう。仮眠をする若い衆もいた。囃子方たちは寝ずに談笑する。	八幡町会館に到着する。萬歳樓側が迎えシャギリで月宮殿の人たちを迎える。萬歳樓の山組の人に筆頭がお酒を渡す。筆頭同士が挨拶をする。その後、萬歳樓から接待を受ける。主にお酒と焼き鳥をいただく。狸丸のときと同じく、萬歳樓の人たちと談笑する。	船町会館を出発する。

【青海山（北町組）】

起し太鼓は若い衆のみが参加する。〇時過ぎから始め、三時頃までおこなう。演奏に合わせて「起ーきよ起ーきよ」とうたう。例年は自町内をまわったあと、ほかの山組の会所へ行くが、調査年度は大震災による自粛のため自町内のみ囃してまわった。なお、青海山は一五日にも起し太鼓をおこなう。

時間	内容
0:30	若い衆が相生会議所に集まり始める。参加者は一五人。起し太鼓に参加するのは若い衆のみで、子どもは不参加である。
0:40	囃子部長から、起し太鼓の連絡事項が伝えられる。①一時頃、一回目の起し太鼓。自町内のみをまわる。②二時または二時半から二回目の起し太鼓。この間、起し太鼓と会議所の片づけをする者に分かれる。③三時頃起し太鼓終了。囃子部長の連絡事項のあと、若い衆筆頭から「一回目の起し太鼓のみで帰る場合は、囃子部長か筆頭に必ずその旨を伝えること」と連絡がある。その後会食をする。
1:05	一回目の起し太鼓に出発する。シャギリマルに若い衆一人が乗って太鼓を演奏し、ほかの若い衆が笛を演奏。「起ーきよ、起きよ」といいながら自町内をまわる。
1:25	会議所に戻り、会食をする。 常磐山の起し太鼓が会議所に訪れたら、酒を渡すという打合せがある。 普段の起し太鼓では、自町内をまわってから他町をまわり、他町から振舞酒などがあるが、今回はおこなわない。
1:45	会食の食べ物が片づけられ、新しい食べ物が用意される。
1:50	常磐山がシャギリを演奏しながら相生会議所に訪れる。常磐山に対して、青海山もシャギリで迎える。青海山の若い衆筆頭と若い衆筆頭心得が提灯を掲げて、会議所の前で常磐山を迎える。青海山の若い衆筆頭が、常磐山を会議所内に招き、酒や食事を振舞う。
2:25	常磐山の起し太鼓が会議所から出発する。常磐山が、青海山の発展を祈念して「ヨイサ、ヨイサ」という。
2:30	常磐山の起し太鼓が帰ると、青海山の起し太鼓を再開し、自町内をまわる。一回目の起し太鼓と同じ道順で町内をまわる。
2:45	起し太鼓が会議所に到着し、シャギリも終わる。
2:50	会議所で会食を再開する。
2:55	食事が終了。一三日、若い衆は一〇時半に会議所に集合するとの連絡事項が伝えられ解散する。

起し太鼓（4月13日）参与観察表（青海山）

時間	内容
22:30	中老・若い衆・囃子方の子どもたちが三〇人くらい輪になって飲食している。飲み物は日本酒・ビール・オレンジジュース。食べ物はお寿司・オードブル・おにぎり。囃子方の女性もいる。稽古舞台の上は中老席で、こたつ布団がかけられたテーブルが置かれている。中老のほかは籤取人や直前筆頭などの若い衆も座っている。 若い衆は「諫」、囃子方は「囃」の字がプリントされた赤いハッピを着用する。「子どもは大人と一緒に飲み食いすると、大人の仲間入りしたような気になる。大人も子どもを大人扱いさせる。ハッピはユニフォームみたいなもの。一体感が生まれる。（若い衆）」
22:37	起し太鼓に出発する。「起ーきよ起きよ……」とうたいながら外に出ていく。町家の外にはシャギリヤタイが置かれている。中老の何人かは外で見送る。
22:43	町家前を出発する。「起し太鼓」を演奏しながらシャギリヤタイを曳いて自町を二周する。笛の吹けない若い衆も一緒にまわる。その後祝町会館に向かう。
23:00	鳳凰山の祝町会館に到着する。席に着き、鳳凰山の若い衆が諫鼓山の若い衆に日本酒・ビールを振舞う。食べ物は揚げ物や魚・スルメ・寿司、子どもたちはお茶を飲む。

起し太鼓（4月12～13日）参与観察表（諫鼓山）

【諫鼓山（御堂前組）】
若い衆の参加が多いが、〇時までは高校生以下の囃子方も多く参加する。例年起し太鼓は鳳凰山・翁山の会所を行き来している。かつては近郊農村の人を雇って起し太鼓をしていたこともある。その後、一時期笛をテープで流して太鼓だけ叩いたこともあった。なお、「起し太鼓」の歌があったが現在はいわれられていない。かつては町内の女性による三味線も入った。女性が来なくなったあと、若い衆がかわりに三味線やエレキギターを弾いたこともあった。

0:07	0:04	23:44	23:41	23:36	23:32	23:24	23:06
翁山が見送るなか、諫鼓山は起し太鼓をしながら町家に戻る。太鼓は若い衆が叩く。大分酔っている人もいる。	諫鼓山副筆頭の挨拶で締める。拍手のあと「ヨイサ、ヨイサ」の掛け声上がる。	諫鼓山副筆頭が乾杯の挨拶をする。翁山と諫鼓山まぜこぜに座り歓談。飽きた様子で携帯をいじる子どもがいる一方で、大人と話す子どももいる。	席に着き、翁山の若い衆が日本酒やビールを諫鼓山に振舞う。食べ物は寿司、オカキなど。子どもにはお茶が振舞われる。翁山はハッピを着た人もいれば着てない人もいる。	翁山伊部町会館に到着する。翁山の若い衆は提灯を持って会館前で出迎える。	祝町会館を出発する。鳳凰山は会館の前にシャギリヤタイを出して、起し太鼓をして見送る。	諫鼓山副筆頭が「来年の鳳凰山の出番も頑張ってください。盛り上げましょう」と挨拶すると、籤取人が「ヨイサ、ヨイサ」の掛け声をいい始める。ついで全員で「ヨイサ、ヨイサ」をいう。その後鳳凰山から「諫鼓山万歳」と万歳三唱する。さらに全員で「ヨイサ、ヨイサ」という。諫鼓山はお礼をいい退室する。	諫鼓山筆頭が「今後鳳凰山との付き合いが続きますように、乾杯」と発声し、乾杯する。 若い衆は鳳凰山の若い衆と酒を酌み交わしながら談笑。女性がお酌すること。鳳凰山の人はハッピを着ている。 「例年だと翁山と鳳凰山と諫鼓山とで行ったり来たりしている。お互いバツティングしない様に携帯電話でやり取りする。（諫鼓山中老囃子方）」 子どもたちは暇そうに部屋の隅にかたまっている。談笑したり携帯電話をいじったりする。

1 時過ぎ	0:54	0:50	0:40	0:26	0:14
解散。	負担人はじめ中老は四人が帰宅する。	壽山の若い衆らは退室する。諫鼓山は、起し太鼓を演奏したり扇子を振って見送る。	二回目の起し太鼓が終了する。	一五人くらいで二回目の起し太鼓をする。自町をまわる。	壽山の若い衆が五人くらいで町家にやってくる。提灯を持っているが、シャギリはしていない。日本酒を二升持ってくる。町家のなかでお酒が振舞われる。若い衆や子どもたちは町家の外でふらふらしたり話をしたりする人もいる。子どもは家からの迎えで帰宅する。

【高砂山（宮町組）】

起し太鼓では「桜囃子」という曲のほかに、「正調」という曲を演奏する。「正調」を吹ける人はあまりおらず、若い人が吹けないため廃れかけたことがある。現在は子どもにも教えていないが、出番の前になると若い衆が「正調」の練習をする。「正調」はゆっくりとしたテンポの曲である。現在、萬歳樓で演奏されている「起し太鼓」と同じ曲である。年配者のなかには「正調」を好む人がおり、自分の家の前は「正調」を鳴らしてとおるよう要求したりする。

【壽山（大手町組）】

笛の吹けない若い衆も多く参加し、シャギリヤタイを曳きながら自町を囃してまわる。例年は諫鼓山と常磐山にも囃しながら行くが、調査年度は大震災による自粛のため、囃さずにお酒だけ持って挨拶に行った。

時間	内容
23:00 頃	裸参りの迎え提灯のあと、起し太鼓が始まる。起し太鼓開始時の若い衆は約一〇人である。場所は壽山の若い衆の一人が経営する大手門通りの飲食店である。
23:30 頃	起し太鼓開始。シャギリヤタイを出し、壽山山蔵前まで曳く。太鼓に若い衆一人、笛は筆頭・副筆頭・囃子方・ほか若い衆一人である。残りの若い衆はシャギリヤタイを曳いたり横について歩く。
23:40	酒を贈り合い、挨拶をしたあとに、常磐山と別れ、自町をまわる。
23:50 頃	シャギリヤタイを置く（パン屋の駐車場）。パン屋の店主より「壽山のシャギリが上手になった」との言葉を受ける。
0:15	例年は他町まで遠征するので、日付が変わる前に終わるのは異例である。そのまま諫鼓山町家へ。酒を持参し、挨拶後稽古宿二階で酒を酌み交わす。諫鼓山の中老、若い衆など一〇名ほどがいる。町家前には諫鼓山の囃子方がたむろしている。若い衆の一人は諫鼓山と一緒に起し太鼓を演奏する。諫鼓山の囃子に上手な人があるというのを聞いていたため、一緒にまわって学びたいという気持ちもあったとのことである。
	酒を酌み交わし終え、大手門通りの飲食店前まで引き返し解散した。この店の前は毎年様々な町の起し太鼓でこつた返すので、店を開けておくようにしているとのことである。

起し太鼓（4月12～13日）参与観察表（壽山）

【常磐山（呉服町組）】

基本的に参加は若い衆のみである。二回に分けて囃してまわる。自町をまわる道中では、お世話になっている人の家の戸を叩いたりする。曲に合わせ「起ーきよ、起きよ」とうたいながら進行する。またほかの山組へも激励に行く。かつては、起し太鼓に芸者による三味線がついていた。

時間	内容
22:05 頃	常磐会館内に大人一三人（一名はシャギリのできる女性）がいて、宴席の用意がされていた。
22:09	筆頭から「ただいまより起し太鼓を始めます。今回段取りとか上手いかないところがありました。月宮殿・青海山にも行く予定です。道中は吹きません。まず自町をまわってから月宮殿・青海山へ行きます」と挨拶がある。つづいて負担人が挨拶する。さらに一五、六日の春日山の山迎えと翌日の御幣迎えについての連絡。
23:31	壽山のシャギリが聞こえてくる。
23:32	常磐会館前を常磐山起し太鼓が発発する。若い衆約一〇名である。女性がシャギリヤタイに乗り太鼓を叩く。女性は囃子方のハッピを着用する。「起ーきよ、起きよ」とうたいながら進行する。
23:33	壽山山蔵前、壽山の起し太鼓と合流し談笑する。壽山は若い衆が一〇名程度いる。
23:42	壽山が自町の方へ戻る。常磐山は囃子を止めて一旦自町へ戻る。
23:44	常磐会館に到着する。

起し太鼓（4月12～13日）参与観察表（常磐山）

2:58	2:47	2:41	2:32	2:25	1:55	1:45	1:37	1:00	23:46
田町会館を出発し、常磐会館に戻る。	田町会館前に到着する。シャガリをやめ、月宮殿囃子方から酒の振舞いを受ける。	田町会館へ向け再出発する。このとき、事前の取り決めでは演奏するのは自町のみだが、月宮殿でも演奏をしていた。	常磐会館前に戻る。	青海山と一緒に「ヨイサ、ヨイサ」という。相生会議所前より出発する。	青海山の相生会議所前で、青海山の起し太鼓と合流する。相生会議所のなかへ入り酒や食事を振舞われる。祭りの成功を祈り、頑張ってくださいとの激励をし合う。	二回目の起し太鼓が出発する。	二回目の起し太鼓の出発準備を始める。	常磐会館へ戻り、再び宴会の席に戻る。	一回目の起し太鼓が常磐会館前から出発する。このとき、筆頭が「上の町（上呉服町）・中の町（中呉服町）・下の町（下呉服町）」の順（にまわる）。笛を持っている人は吹くように」と囃子方、若い衆らに指示する。この時点で若い衆は筆頭含め一〇人、加えて女性一人がいる。 滋賀銀行長浜駅前支店前・郷土資料館前・黒壁前・願養寺前を通過する。道中、若い衆らは役者の家やいつもお世話になっている人の家の壁やドアを叩く。

0:51	23:00	時間	内容	3:05	3:27
ヨイサ」といって見送る。	一回目の起し太鼓が終了した若い衆が会館に到着する。一人が諫鼓山の起し太鼓に参加している娘を迎えにいくので、萬歳樓の何人かが「ヨイサ、ヨイサ」といって見送る。		八幡町会館に集合。ただし月宮殿の裸参りの迎えシャガリをしたあとそのまま会館で待機していた人もいる。若い衆ばかりで、子どもはいない。人数は一五人程度である。着流しにハッピーの人と普段着にハッピーを羽織る人もいる。ハッピーは囃子連中のハッピーである。 （一回目の起し太鼓をするが参与観察できず。）	常磐会館前に到着する。副筆頭の指示で、片づけを始める。 会館外でシャガリヤタイを片づける。屋根に緑のシートをかけ、側面にはビニールシートをかぶせる。このビニールシートには穴が開いていて、それを屋台についているフックに引つ掛ける。長く使う物なので、雨などから守るためである。使うたびに組み立てるのが結構面倒だが、そのまま置いておくスペースはないので仕方ないとのことである。一方、会館内でも片づけをする。 片づけが終わり、若い衆らは解散する。	

起し太鼓（4月12～13日）参与観察表（萬歳樓）

2:48	2:35	2:08	2:05	1:53	1:50	1:35	1:30
しばらく狸々丸の若い衆と雑談する。 種が振舞われる。 狸々丸の船町会館に到着する。会館の前で茶・酒・握り飯・スルメ・柿の	起し太鼓に出発する。囃子会長を先頭に、列になって歩いていく。道中「起し太鼓」を吹く。全員で行くため、会館は留守になる。	一場面を演じる。年上の若い衆が合の手を入れてのせる。	囃子会長・顧問などは提灯を持って、月宮殿が見えなくなるまで見送る。	鳥を会館の前で振舞う。会館の前で立ち話をする。	なかにいる若い衆は一斉に外に出て「起し太鼓」を吹いて月宮殿を迎える。	見送りを終えた若い衆は八幡町会館に入室する。なかでは既に四、五人が酒を飲んだり、食事をしたり、話をしている。会館にいるのは全員男性である。飲み物はビール・日本酒・ウーロン茶・りんごジュース。食べ物は揚げ物・おにぎり・寿司・スナック菓子。シャギリ副会長曰く、「自分は片づけ担当。若い衆の若い方が片づけしつ、酒を飲んでいく。」	八幡町会館に来ていた狸々丸を萬歳樓は「起し太鼓」を吹いて見送る。提灯を持って見送る人もいる。

5:41	5:37	5:22	5:20	5:15	4:55	4:02	3:57	3:48	3:20	3:15
萬歳樓は、船町会館を出発する。										
田町会館に到着する直前に曲を「別嬪」にかえる。										
田町会館に到着し、しばし会館前で雑談する。										
「起し太鼓」を吹きながら田町会館を出発する。途中で直前筆頭・以前の囃子会長・御幣使の家の前で、数分ずつ止まって吹く。										
萬歳樓が八幡町会館に到着し、しばらく会館前で「起し太鼓」を演奏してから、会館に入っていく。										
何人かは着替えをするために一旦家に戻る。										
若い衆は徐々に寝始める。										
囃子会長が起し太鼓に行こうと寝ている若い衆に声を掛ける。										
九人で出発する。皆眠そうにとぼとぼと歩く。提灯は持たない。「別嬪」を演奏する。										
以前の囃子会長宅前に到着する。一分ほど止まって吹いて再出発する。										
自町の西端まで行くと引き返す。曲を「起し太鼓」にかえる。その後、前筆頭の家の玄関先に立ち寄って吹く。また玄関先まで出てくる町の人に挨拶をする。そして横浜町の端で引き返し、着付け親の家の前に立ち寄る。着付け親は今でも中老の着付けや散髪をしている。										
八幡町会館に到着する。「起し太鼓」を一回とおして吹く。一人が「別嬪」を吹き始めると、皆が続いて吹き始める。吹き終わると「ありがとうございまして」、「お疲れ様です」と挨拶し解散する。										
囃子副会長などが片づけをする。										



起し太鼓（常磐山）道中、祭り関係者の家の戸を叩く（平成23年4月12日23:57撮影）



起し太鼓（月宮殿）田町会館に萬歳樓の若い衆らが挨拶に来る（平成23年4月13日3:48撮影）



起し太鼓（常磐山）女性がシャギリヤタイで太鼓を叩くこともある（平成23年4月13日1:53撮影）



起し太鼓（萬歳樓）祭り関係者に挨拶する（平成23年4月13日5:22撮影）

第五項 御幣迎え

御幣迎えは、一日に太刀渡りに用いる金幣や曳山に飾る御幣（幣帛）を八幡宮へ受け取りに行く行事である。これには長刀山を含めた一三の山組が参加する。午前七時までに、金棒曳きの先導で、負担人・若い衆・中老・御幣持（御幣使ともいう）・神持・露払が御幣迎えに行く。社務所に設けられた總當番の受付で挨拶と記帳をおこない、負担人と御幣持は儀式殿に入って着席する。すべての山組が揃うと、總當番委員長・宮司の挨拶後、宮司の作った玉籤を長刀山以外の山組が到着順に引き、御幣拝受の順番を決める。籤順に幣殿に上がり、金幣・御幣を拝受する。拝受後、總當番委員長の挨拶を経て自町に戻る。自町に持ち帰られた御幣は、本番まで御幣宿などに預けられる。

第六項 神輿渡御

九時半から神幸祭、一〇時から八幡宮から御旅所へ氏子からの担ぎ手によつて神輿の渡御をおこなう。なお、平成二三年は東日本大震災による自粛のため、御旅所への神輿の渡御を取りやめ、真榊による渡御となった。

第七項 籤取り式

籤取り式は狂言執行の順序を決める行事である。四月一日一三時一五分頃から八幡宮でおこなわれる。昼前に各山組で集合して会食をする。月宮殿では御幣宿で若い衆と役者で会食するが、諫鼓山では御堂前会館で中老が若い衆を接待する形式で会食する。その後、シャギリに送られながら、若い衆は「ヨイサ、ヨイサ」と掛け声を上げ八幡宮に向かう。

この際、例年は籤取人が生きた鯉を三方に載せて持つていき、八幡宮の放生池に放す山組があるが、平成二十三年は大震災による自粛でおこなわなかったところもある。

八幡宮に着くと總當番の受付で記帳し、負担人と籤取人は社務所の入口から儀式殿へ入る。到着順に幣殿での着席順を決める玉籤を引き、その順に幣殿に上がる。次に籤取人は宮司による花籤を引き、その順に本籤の載った三方を取りにいく。幣殿の外では若い衆が応援しながら様子を見守る。全員が三方を選び終わると總當番の合図で一斉に籤を開く。籤を引き終わると本殿に参拝し各町へ戻っていく。

好まれる籤は表向きは一番山だが、本心では四番山だという山組もある。理由に、四番山は一日の御旅所での狂言執行の際、提灯を灯しておこなえるため綺麗に見えるうえ観客が多く、そして朝の準備を遅くできることなどが挙げられる。以下、諫鼓山での聞き取りを掲載する。

放生 籤取り式への出発前、中老が若い衆を接待するが、例年なら、出立ちのときに中老が若い衆に鯉を渡す。鯉を三方に載せ籤取人が持つて八幡宮へ行く。そして、八幡宮の放生池に鯉を放す。今年はい自粛のため、鯉を放さなかった。鯉が暴れないように、出立ちのときに鯉の目を塞いで縛っておく。放したのに弱っていて水面に浮いてしまうこともある。鯉の尾を持ち上げて形よく仕上げようときつく縛るため、折れることもある。

好む籤 籤取人として引きたいのは一番山。しかし、四番山なら、御旅所での狂言執行のときに曳山にヒ（灯り）が入って綺麗に見える。また時間が遅いと家族連れで見にくいため客が多く、四番山を引きたいという気持ちも強い。見てもらうという意味では、四番山である。籤取人の経験者によると、籤取人をしたときは四番山だっ

たので本望だったという。一番山を引くと、役者の準備も早くしなければならぬように、御旅所に到着してもまだ陽は高い。表向きは一番を願うが、皆本音は四番山を期待している。

四番山が好まれる理由として、自分の山組のペースでできることも挙げられる。歌舞伎の出だしがゆっくりできたり、狂言時間が延びてもほかの山組に迷惑を掛けない。あとに山組が控えていると、せわしくなる。狂言時間が延びると文句をいわれることもある。

一番山は奉納第一番ということで、三番叟をおこなえるめでたい籤だが、若い衆からすると三番叟の対応が大変と感ずることもある。役者の子から三番叟の子が孤立することもあり、その対応が大変だったりする。シャギリの立場からしても、一番山は厳しい。翁招きや御旅所での神輿還御のときにシャギリを始めるタイミングが難しい。



籤取り式（青海山）若い衆宿でよい籤を祈念（平成23年4月13日10:59撮影）



籤取り式（諫鼓山）籤取り式前に町内の日吉神社に参拝（平成23年4月13日12:03撮影）



籤取り式（月宮殿）幣殿の外で籤取り式の応援をする（平成23年4月13日13:38撮影）



籤取り式（青海山）籤取人が八幡宮の池で鯉を放生（平成23年4月13日撮影）



籤取り式（春日山）横断幕を持って春日会館に戻る（平成23年4月13日撮影）



籤取り式（諫鼓山）式後、籤取人を労う若い衆（平成23年4月13日13:39撮影）

第八項 曳山狂言

長浜曳山祭の狂言は六歳から一二歳くらいの男子によっておこなわれる芸能である。制限時間は四〇分と決められている。内容は狂言や歌舞伎をもとにしたものが多いが、振付の創作した作品もある。制限時間が四〇分と決められているため、長浜曳山祭用の狂言を仕組まなければならず、振付がもとの話を短縮するなど脚色して上演する。

狂言は四月一三日から一六日にかけて各山組一〇回程度おこなわれる。一三日は午後から各町内の屋外で一、二回狂言をおこなう。一三日の狂言は十三日番や自町狂言という。一四日も午前中に各町内の屋外で一、二回狂言をおこなう。一五日は八幡宮と、八幡宮から御旅所に移動する間、そして御旅所で狂言をおこなう。八幡宮から御旅所の間には狂言をおこなう場所（席）が五ヶ所設けられ、各山組はそのうち二ヶ所で狂言を一回ずつおこなう。五ヶ所の席は付近の店の名前などから鮎熊例席・金屋例席・一八屋例席・米嘉例席・札の辻例席と名付けられている。鮎熊例席は宮町通りにあり、ほかの四席は大手門通りにある。一六日は午前から午後にかけて各町内で三回、さらに長浜文化芸術会館で一回狂言をおこなう。一六日の狂言を後宴狂言というが、とくに最後の狂言を千秋楽という。

ここでは、(1)準備、(2)狂言、(3)舞台周りの若い衆、(4)衣装屋・顔師・鬘屋の動きを中心とした狂言の舞台裏、(5)舞台後見、(6)シャギリ、(7)千秋楽に焦点を当てて見ていく。

(1) 準備

山組は曳山で狂言をおこなうに当たり、その前に多くの準備をする。大きく分けて狂言に関するものと曳山に関するものがある。狂言に関

する準備の主なものは役者の化粧・鬘合わせ・着付けと、狂言の道具などを曳山に設置することが挙げられる。これは若い衆が担当することが多い。一方曳山の準備の主なものに、曳山の所定場所への据えつけ、懸装品の飾りつけ、照明の設置が挙げられる。これは中老が担当することが多い。

化粧や着付けは春日山・青海山・諫鼓山は会所でおこなうが、月宮殿は狂言執行場所（席）から近い民家を化粧宿・風呂宿として借りておこなう。ここでは月宮殿における平成二三年四月一三日の自町狂言を例に見ていく。

月宮殿では狂言の準備を若い衆・振付が中心となっておこなう。なお、振付によって狂言の準備へのかかわり方は異なる。月宮殿の若い衆によると平成二三年の月宮殿の振付である岩井小紫氏は中歌舞伎での役者の経験があるため、化粧や鬘・衣装・道具に対する造詣が深く、指示を細部にまでする。

そのほか、副筆頭が準備の指示を出す。役者方は役者につき添い移動や食事の手伝いをする。食事は化粧をした役者に役者方が食べ物を小さく切って食べやすくする。飲み物はストローで飲ませる。舞台後見は舞台上の道具の準備をおこなう。賄い方は通常物品の調達をおこなうが、ここではとくに役者や三役、若い衆などの食事の手配をおこなう。囃子方総責は囃子方の取りまとめをする。

一方曳山の準備は中老が中心となっておこなう。曳山を所定の場所まで曳行する際に近隣に住む女性に加わることもある。

月宮殿には化粧宿・風呂宿のほかに三役宿もあり、三役の控室となる。

調査日	時間	場所	内容	12:51	13:02	13:07	13:42	13:50	13:52	14:22	14:29	14:30
				（月宮殿山蔵前には山蔵から出された曳山があり、車輪の下には方向転換用の板（コンパネとよぶ）がはさんである。中老のみで曳山を曳く。） （曳山の前方で中老の一人が拡声器を持ち、運行の指示を出す。） （近隣に住む女性が中老の指示で図書館前の交差点までコンパネを移動させる。） （図書館前の交差点での方向転換では女性も手伝って綱を引く。このとき曳山に当たらないよう信号をロープで引っ張り動かす。） 一八時から狂言をおこなうタケツネ席とよばれる場所の前に化粧宿があり、そこに狂言の準備のため若い衆が数人出入りする。 （曳山が町内のタケツネ席前に停止。中老が車両進入禁止の看板を立てておくよう若い衆に指示する。中老数人で花道を出す。） （正負担人が外題板を曳山の柱に掛ける。中老数人が曳山に上がり幕などの懸想品の飾り付けをする。） 化粧宿内には振付・三味線・三味線の下座・鬘屋・顔師二人がいる。顔師と振付がどのような化粧にするか相談する。振付「太田十郎は二枚目だからそんな顔にして」と要望を出す。その後振付と鬘屋が打合せをする。 （副筆頭が御幣を御幣宿から持ってきて、曳山に取りつける。） 田町会館前では囃子方の子どもたちがシャギリマルに載せていたジュースを飲み休憩している。そこへ囃子方総責から、一八時半から演奏するため、延長坊に一六時半に再集合と連絡があり、解散する。 囃子方の高校生が太鼓を曳山まで運び亭に上げる。								

狂言の準備参与観察表（月宮殿） 曳山の準備は括弧書きで記す

15:10	15:06	15:05	14:51	14:49	14:45	14:42	14:41	14:39	14:34
若い衆は振付と役者の食事をとる時間を打合せ、賄い方に食事を出す時間を指定する。	風呂宿から役者・榊持・御幣持・役者方が化粧宿に来る。振付が「みんな、（化粧や着付けを）やってもらうときに（顔師などに）お願いしますというように」と役者に声を掛ける。沢瀉姫役から化粧を始める。	賄い方が化粧宿にビールと弁当を持ってくる。	風呂宿の様子 それぞれの役者に役者方がついて風呂から上がった子どもを着替えさせる。 個々の役者には風呂宿に、着替えなどの必要なものをセットにした袋が用意されている。	（花道を固定する楔がはずれてしまい、中老三人が花道を直す。）	（風であおられるため）もう少し下を重くした方がよい」と指示する。三味線と若い衆二人とで幕を調整する。	役者方が役者の着替えの入った袋を持って、化粧宿から風呂宿に向かう。	若い衆三人が狂言で使う吊り太鼓と大太鼓を化粧宿から曳山に上げる。	（化粧宿から振付が出てきて曳山の舞台を見る。前だけでなく横、後ろもチェックする。）	（曳山舞台上の中老が雑巾で舞台を拭く。下にいる中老は花道を安定させるための楔をいれる。その後中老の一人が花道の上に登り、安全を確認する。）

16:36	16:30	16:28	16:07	16:04	15:49	15:34	15:32
音響業者によりスピーカーなどの機材が運ばれてくる。取りつけや音響チェックが業者によりおこなわれる。	副筆頭と若い衆ら数人が「一七時四五分には役者を曳山に上げたいが、まだ御幣持と榊持（の準備）が終わってないしなあ」とぼやく。	演中曳山の後ろで役者の待機する場所に敷かれる。 振付が舞台後見にどの小道具を曳山に置いておくか指示する。	延長坊前に、囃子方一三人が集まり食事をとる。 太夫の竹本美功太夫氏が若い衆の運転する車で三役休憩宿に入る。	手の空いた若い衆は交差点で交通整理をする。 役者・御幣持・榊持の順に撮影をし、一七時二〇分に全員の撮影が終わる。	役者を一人ずつ舞台上に上げ写真撮影をする。 マネキも舞台上に置き、その隣でポーズを取らせて撮影する。 撮影時の着物やポーズは振付の岩井氏が下から指示を出し、三味線の豊澤清次郎氏が曳山の上でポーズをとらせる。岩井氏は女性のため曳山に上がれず、男性の豊澤清次郎氏に舞台上に上がってもらっている。	副筆頭は振付から長刀を三枚刃から二枚刃に変更するように指示を受けたため、若い衆の一人に、舞台後見と役者方に小道具を確認するように、と伝言を頼む。	若い衆一人が役者方に役者の下駄を新しい物に交換するよう指示する。 役者方は役者が履いてきた下駄を新品の下駄に交換する。 「十三日 自町狂言（一回目） タケツネ席 開演時間 十八時〇〇分 月宮殿田町組」と書かれた立て札が舞台上に置かれる。

18:06	17:56	17:55	17:53	17:45	17:42	17:40	17:25	16:58
舞台上で座っていた役者は楽屋に入っていく。	太夫の竹本美功太夫氏到着、楽屋へ入る。	タイミングを指示する。	若い衆らが三役が座りやすいように楽屋襖をはずして化粧宿へ運ぶ。その後、三味線と三味線の下座が曳山の楽屋に上がる。	副筆頭が亭にいる囃子方にシャギリを「獅子」から「ナナシ」にかえる	副筆頭が「道具が上がったら、役者上げます」と全体に指示する。	役者方が狂言で使う道具を楽屋に上げる。副筆頭が「道具が上がったら、役者上げます」と全体に指示する。	八人が曳山の後ろで待機する。	囃子方約一五人が曳山前に到着する。 囃子方総責が亭で演奏する子どもを五人指名して亭に上がらせる。残り八人が曳山の後ろで待機する。
			筆頭と囃子方総責が相談する。	曳山の横でシャギリを「獅子」から「ナナシ」にかえるタイミングを副	役者方は役者方に抱えられ舞台上に上げられる。役者全員が舞台上に座る。	副筆頭から囃子方総責に開始が一二三分遅れるかもしれない、と連絡があり、囃子方総責は囃子方の子たちにその旨を伝える。	副筆頭は楽屋が狭いので、月宮太郎役を最初から曳山に乗せるかどうか役者方・舞台後見と相談する。	「ござが曳山の後ろに敷かれ床几が四つ並べられる。ここで上演中の役者の待機場所、着付の手直しや化粧の手直しなどがはここでおこなわれる。
						亭に電気が点く。		若い衆の一人が、化粧宿内の役者方に手が空いている人から弁当を先に食べておくよう指示する。



狂言準備（月宮殿）花道を引き出す（平成23年4月14日10:06撮影）



狂言準備（諫鼓山）山蔵から曳山を出す（平成23年4月14日8:02撮影）



狂言準備（春日山）化粧（平成23年4月14日撮影）



狂言準備（月宮殿）曳山に道具が運び込まれる（平成23年4月13日17:39撮影）



狂言準備（春日山）山組の女性が幟のチチを縫いつける（平成23年4月14日11:55撮影）



狂言準備（諫鼓山）狂言準備（諫鼓山）振付が出番前に指導する（平成23年4月15日10:50撮影）



狂言準備（諫鼓山）着付け（平成23年4月13日16:14撮影）

(2) 狂言

ここでは狂言のスケジュールおよび、長浜曳山祭の狂言の特徴がよく表れる幕開けと幕切れを重点的に見ていきたい。

まずスケジュールから見ていく。一五日の狂言執行スケジュールは總當番が決め、一六日の長浜文化芸術会館の観劇会は、長浜曳山祭協賛会の日程による。それ以外は各山組でスケジュールを決める。各山組で狂言執行時間・回数は異なり、複数の山組が同時時間帯に狂言を執行することもある。

なお、前述したとおり四月一三日・一四日・一六日は各町内で狂言をおこなう。ただし一六日は一回のみ観劇会として長浜文化芸術会館で狂言をおこなう。一五日は八幡宮および八幡宮から御旅所までの道中、御旅所で狂言をおこなう。

（スケジュール）

【春日山（本町組）】

一番山の春日山の狂言の執行スケジュールは次のとおりである。

四月一三日、自町狂言一八時。四月一四日、自町狂言一時。四月一五日、長浜八幡宮九時五五分・一八屋例席一二時一〇分・札の辻例席一四時一〇分・御旅所一六時一〇分。四月一六日、自町にて後宴狂言九時半・長浜文化芸術会館一時半・自町にて宴狂言一六時・自町にて千秋楽二〇時。

【月宮殿（田町組）】

二番山の月宮殿の狂言の執行スケジュールは次のとおりである。

四月一三日、自町狂言一八時・二〇時。四月一四日、自町狂言九時・一〇時半。四月一五日、八幡宮一―時五分・金屋例席一三時二〇分・米嘉例席一五時二〇分・御旅所一七時二〇分。四月一六日、自町にて後宴狂言九時三〇分・長浜文化芸術会館一二時四五分・自町にて後宴狂言一五時・自町にて千秋楽一九時半。

【青海山（北町組）】

青海山の狂言の執行スケジュールは次のとおりである。

四月一三日、自町狂言一九時。四月一四日、自町狂言九時一五分・一〇時一五分。四月一五日、八幡宮一二時一〇分・鮎熊例席一四時一〇分・一八屋例席一六時一〇分・御旅所一八時三〇分。四月一六日、自町にて後宴狂言一〇時三〇分・長浜文化芸術会館一四時・自町にて御宴狂言一七時・自町にて千秋楽一九時半。

【諫鼓山（御堂前組）】

諫鼓山の狂言の執行スケジュールは次のとおりである。

四月一三日、自町狂言一七時・一九時半。四月一四日、自町狂言一〇時半。四月一五日、八幡宮一三時一五分・金屋例席一五時二〇分・米嘉例席一七時三〇分・御旅所一九時四〇分。四月一六日、自町にて後宴狂言一〇時三〇分・長浜文化芸術会館一五時一五分・自町にて御宴狂言一八時・自町にて千秋楽二〇時。

（幕開け）

つぎに狂言の幕開けと幕切れを見ていく。基本的には、囃子方が「御遣り」や「神楽」などのシャギリを演奏するなか、役者が舞台に揃うと、

お辞儀をして楽屋へ入る。役者が楽屋へ入ると、囃子方は「奉演間」・「ナシ」・「太平楽」といった落ち着きの曲を鳴らす。そして上演の準備が整うと「出笛」が鳴る。「出笛」の最後の音に被せるように、若い衆や観客の拍手や「よくできました」の掛け声上がる。「出笛」の音が鳴り終わるとすぐに、三味線が出三味線を弾き始める。この出三味線は道具返しともよばれる。出三味線は三〇秒程のときもあるが二、三分続くこともある。上演時間に余裕があるかないかで長さがかわってくる。そして三重ともいわれる太夫の節が始まる。ここでは「めでたけれ」といったり、「ウー」などと唸ったりする。その後置き浄瑠璃ともよばれる太夫の語りがある。ここでは長浜の紹介や、狂言の紹介がおこなわれる。そして本編に入る。しかし置き浄瑠璃がない山組もある。

なお、一番山では、落ち着き囃子（「奉演間」など）のあとに三番叟が入る。また外題によつては舞台方による口上がおこなわれることがあるが、口上を「出笛」の前におこなう山組と、本編の直前におこなう山組がある。狂言時間は「出笛」から計算されるので、もし、口上を「出笛」の前におこなう場合、口上は狂言時間には換算されない。近年口上を取り入れる山組が多くなっている。また、幕開けおよび幕切れの状況は、自町狂言と八幡宮での奉納と異なることがある。

【春日山（本町組）】

四月一三日の自町狂言を例に春日山の幕開けを見ていく。

囃子方が「御遣り」を演奏するなか、役者が舞台上でお辞儀をする。役者が楽屋に引くと、囃子方は「奉演間」を演奏する。「奉演間」が終わると、一番簀を引いた春日山では三番叟が舞台上で舞われる。三番

叟が終わると囃子方が「出笛」を吹く。「出笛」の最後の音が鳴ると、音に被せるように若い衆から拍手や「よくできました」と掛け声上がる。「出笛」の音が完全になくなると出三味線が鳴り始める。一分ほどで太夫が「栄えゆく」と三重をうたう。そして「今に伝わるこの祭り……、爽やかなりし、その姿」と置き浄瑠璃がうたわれる。そして舞台方が舞台上で口上を述べる。口上が「一座高うは御座りまするが、口上なもつて申し上げ奉りまする。私春日山舞台方〇〇（名前）。本年本町組狂言名題」というと、舞台の周りにいる若い衆が「トザイトーザイ」と声を合わせていう。舞台方が続けて「えびす詣で恋の釣針（外題）相勤めまする役人替名、〇〇（役名）一役、〇〇（本名）、……（以下一人ずつ役名と本名が紹介される）。一座総出演にて相勤めますれば、最後までゆるゆるゆるゆると御見物の程、隅から隅までずらずーっと、請い願ひ上げ奉りまする」と口上を述べる。拍手や掛け声が起きると同時に、三味線と太夫が再度鳴り始め本編が始まる。

【月宮殿（田町組）】

四月一四日の自町狂言を例に幕開けを見ていく。

囃子方が「獅子」を演奏するなか、役者が舞台に出て顔見せする。役者が楽屋に引き、しばらくすると囃子方は曲を「ナナシ」にかえる。そして「出笛」が演奏される。「出笛」の最後の音が鳴り終わると、若い衆が拍手や「よくできました」と掛け声を上げる。そして出三味線が弾き始められる。三〇秒程弾かれると、太夫が「めでたけれ」とうたう。そして本編に入る。

【青海山（北町組）】

四月一三日の自町狂言を例に幕開けを見ていく。

囃子部が「豊公楽」を演奏するなか、役者が舞台上で顔見せをする。役者が楽屋に引くと、囃子部は曲を「太平楽」にかえる。その後拍子木が二回打たれ、舞台方が「トザイトーザイ」といいながら舞台に出てくる。若い衆が「待つてました」と掛け声を入れる。舞台方が座り、口上を述べる。「一座高うはございまするが、口上なもつて申し上げ奉りまする。今日のところご覧にいまする北町組青海山狂言名題、トザイトーザイ、玉藻前囃袂、玉藻前囃袂三段目道春館の場（外題）。トザイ、トーザイ、相勤めまする役人替名〇〇（役名）一役〇〇（本名が二回繰り返しいわれる）、……（以下一人ずつ役名と本名が紹介される）、太夫、竹本団勇、竹本団勇。三味線豊澤賀祝、豊澤賀祝。我らが先生、川村和彦、川村和彦。みんなが元氣になりますよう、一生懸命相勤めますれば、青海山子ども歌舞伎、御最前お引き立ての程、隅から隅までずーっと御願ひ申し上げ奉りまする。トザイトーザイ」。舞台方が楽屋に引くと囃子方が「出笛」を鳴らす。最後の音が鳴ると、若い衆たちから拍手や「よくできました」と掛け声上がる。拍手が鳴りやまないうちに出三味線が始まる。三分程度続き、三味線が盛り上がると若い衆たちから拍手や「賀祝さん！」などの掛け声上がる。そして太夫が「エ」と唸り、三重をうたう。ちなみに千秋楽のときは、ここで「千秋楽」とうたう。そして「近江の国は長浜の、青海山の稚児歌舞伎、熱演するぞ、ゆかしけれ」と置き浄瑠璃をする。そのあと舞台後見によって拍子木が一回打たれ、本編に入る。

【諫鼓山（御堂前組）】

四月一六日の後宴狂言を例に見ていく。

役者が狂言前の挨拶のために舞台に出ると、囃子方は一六日は「御遣り」にかわって「戻り山」を吹き始める。役者がお辞儀をして楽屋に引くと、囃子方は曲を「奉演間」にかえる。「奉演間」が終わると、「出笛」を鳴らす。「出笛」の最後の音が鳴ると、若い衆が拍手をしながら「よくできました」と掛け声を上げる。拍手が鳴りやまないうちに三味線が始まる。自町狂言は時間の制約があまりないため三味線を長めにする。途中若い衆から「たっぷり!」「勝二郎（三味線の名前）」と掛け声上がる。三味線が三重に入る合図を太夫に目で送ると、曲は三重にかわり太夫が「名にし負う」とうたう。そして「滋賀の国、琵琶湖の畔、長浜の大通寺の門前町、諫鼓山」。紅顔華麗の美少年、熱演するぞ、貴けり」と置き浄瑠璃をする。置き浄瑠璃の間も若い衆が「朋太夫（太夫の名前）」など掛け声を上げる。置き浄瑠璃が終わる、そのまま本編に入る。ちなみに千秋楽では「千秋楽」の一節が三重の最初に入る。

（幕切れ）

最後に幕切れについて見ていく。太夫が狂言の最後にキオイ三重や段切ともよばれる太夫の節をいうと、既に劇中で死んだ役の役者も含めて役者全員が舞台に登場して見得を切る。さらに舞台後見と舞台方も舞台に出てお礼の挨拶をする。挨拶が終わると「神楽」や「獅子」といった狂言終了のシャギリが鳴らされる。しかし春日山や諫鼓山は役者全員で見得を切ることはない。さらに月宮殿のように挨拶のあと

に若い衆が「ヨイサ、ヨイサ」の掛け声をする山組があったり、狂言終了のシャギリを鳴らし始めるタイミングが山組によって異なったりするなど、幕切れの仕方には山組によって違いが見られる。

【春日山（本町組）】

狂言の最後に役者と舞台方が花道を練りあるく。太夫が最後の節をいうと、役者・舞台方・三番叟・舞台後見が舞台に正座し、「ありがとうございました」と挨拶をする。すると、太夫の三味線が終わらないうちに、囃子方が「神楽」を演奏し始める。

【月宮殿（田町組）】

四月一四日の自町狂言を例に見ていく。

太夫が段切りの「怒れる眼 物凄く 島田解けて 逆様に たちまちや夜叉の鬼瓦」とうたい、最後に「足柄山へうえ」とキオイ三重をうたい終わると、既に劇中で死んだ役の役者も含め全員舞台に出て見得を切る。この間太夫は「えゝ、えゝ」といい続け、舞台後見はツケと拍子木を叩き、若い衆が太鼓と笛を鳴らし、観客からは拍手や掛け声上がり大変にぎやかになる。見得を切り終わると、太夫の節と三味線が鳴り終わらないうちに、囃子方が「獅子」を演奏し始める。また、舞台後見と小舞台も舞台に登場し、正座をして全員で手をついて「ありがとうございました」と挨拶をする。そして、曳山の周りには若い衆から「ヨイサ、ヨイサ」と掛け声上がる。

【青海山（北町組）】

太夫が段切りの節をいうと、役者は全員で見得を切る。このとき拍

子木やツケが打たれる。太夫と三味線が鳴り終わると、舞台方も舞台に出てきて、挨拶をする。舞台後見は舞台に出てこない。挨拶が終わると、すぐに囃子方が「神楽」を演奏し始める。

【諫鼓山（御堂前組）】

四月一六日の後宴狂言を例に見ていく。

狂言の最後に、太夫と三味線の「高砂」の曲に合わせて、役者全員で総踊りをする。このときは既に死んだ役の役者も出てくる。総踊りのあと、太夫が「春重四海波、今に伝えて、え、え、え……」と節を入れると、舞台方と舞台後見も舞台に出て、全員で三方に礼をしたのち、手について「ありがとうございました」と挨拶をする。挨拶が済むと、三味線と太夫の節が終わらないうちに、囃子方が「神楽」を演奏し始める。そして、太夫と三味線が完全に鳴り終わると、舞台後見・舞台方・役者は楽屋に引いていく。

調査日	場所	内容	時間
平成二三年四月一三日	オオノ辻・諫鼓山山蔵		
19:20		オオノ辻に据えつけられている曳山の亭に男性の囃子方が上がる。	
19:35		女性の囃子方は曳山の横に待機する。	
19:36		役者が舞台に出てくると、囃子方の「御遣り」が始まる。役者がお辞儀をして楽屋に戻る。時間が遅れているので、囃子方はいつもなら「御遣り」の終わりまで吹くところを途中で止めて「奉演間」にかえる。「奉演間」を一段吹いて、「出笛」を吹く。「出笛」が吹き終わると、狂言が始まる。シャギリへの指示はすべて舞台後見がおこなう。	

自町狂言 参与観察表（諫鼓山）

22 時頃	20:54	20:50	20:48	20:37	20:30	20:32	20:30	19:45	19:40
曳山が山蔵に納められるまで囃子方はずっと吹いていた。	三役は宿に帰る。	中老が曳山を山蔵に戻す。囃子方が「御遣り」を吹きながら曳山についていく。	舞台後見は曳山から下り、町家に着くまで反省点を話している。そこに振付・太夫・三味線が来て、最後の桜吹雪の散らし方が弱い、最後はもっと大量に降らすようにと指摘する。	囃子方は曲を「神楽」から「御遣り」にかえる。中老は観客の椅子を片づけ、舞台後見は舞台の掃除をする。若い衆は下に落ちた紙吹雪を掃き取る。	太夫と三味線が曳山から下りる。舞台後見は曳山に設置した照明を撤収し、中老は花道を片づけるなど、曳山を山蔵に戻す準備を始める。	狂言が終わる、役者と舞台後見が「ありがとうございました」と挨拶をする、囃子方は「神楽」を演奏し始める。役者と舞台後見は舞台の後ろにある楽屋に引く。役者係が役者を楽屋の後ろから下ろし町家に連れていく。	最後の衣装替えが終わると、衣装替えの為に曳山の後ろに設置していたテントとブルーシートを片づけ始める。	衣装替えの手順は、まず若い衆が曳山から子どもを抱え下ろし、衣装屋の前に下ろす。衣装屋が着替えさせている間に鬘屋が鬘を交換する。その間若い衆が刀などの小道具を装着する。衣装が整ったら、顔師が化粧を施し、全体を確認して、若い衆が曳山に抱え上げる。このときは若い衆が片づけや小道具の装着をスムーズにおこなう。	役者が登場するタイミングが遅れると、振付がすかさず横から幕を開けて舞台後見に注意する。花道の脇には若い衆が曳山を囲むように立っている。役者が花道を歩くときは花道が傾かないように下から押し上げる。また、舞台後見が舞台に出るときに幕の開け閉めを手助けする。役者が衣装替えに手こずり登場までに時間がかかるときは、幕間に舞台転換の準備をする舞台方がゆっくり歩いたりするなどして時間稼ぎをする。



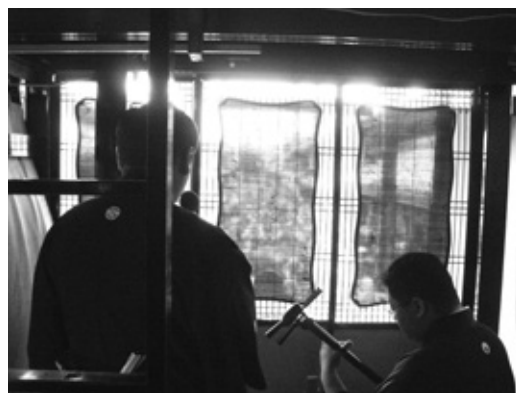
狂言（春日山）舞台方による口上（平成 23 年 4 月 16 日 9:38 撮影）



狂言（春日山）三番叟（平成 23 年 4 月 16 日 9:35 撮影）



狂言（月宮殿）若い衆が狂言の最後にお囃子の太鼓を叩く（平成 23 年 4 月 14 日 9:42 撮影）



狂言（諫鼓山）太夫と三味線は舞台障子越しに外の様子を見る（平成 23 年 4 月 16 日 11:09 撮影）



狂言（青海山）狂言の最後に役者全員で見得を切る（平成 23 年 4 月 15 日 12:54 撮影）



狂言（諫鼓山）場面転換を知らせる舞台方。役者の登場が遅れると場を持たせたりする（平成 23 年 4 月 16 日 11:09 撮影）



狂言（青海山）狂言終了の挨拶（平成 23 年 4 月 15 日 12:54 撮影）



狂言（青海山）（平成 23 年 4 月 16 日 20:05 撮影）



狂言（春日山）（平成 23 年 4 月 16 日 10:10 撮影）



狂言（諫鼓山）（平成 23 年 4 月 13 日 17:41 撮影）



狂言（月宮殿）（平成 23 年 4 月 16 日 10:16 撮影）

(3) 舞台周りの若い衆

曳山の舞台周りを一〇人程度の若い衆が取り囲み、以下のような役割を果たしている。①掛け声（大向うともよばれる）を掛けたり、拍手をして狂言を盛りあげる、②花道を下から支えて役者が歩きやすいようにする、③楽屋を目隠しする花道幕を押さえて風で翻るのを防ぐ、④舞台後見が見栄えよく舞台へ出入りするために花道幕を開け閉めする、⑤狂言執行の途中で配置転換をする大道具などを曳山に設置する。掛け声は役者に対するもののほかに、太夫・三味線・囃子方に対するものもある。以下に主な掛け声を列挙する。

囃子方の出笛が終わると、「よくできました」という。

狂言の幕開きの、三味線が弾き鳴らす場面（メリヤス）では、「勝二郎！」など三味線の名前をいう。出三味線後の太夫の語りが終わると、ここでも「朋太夫！」など太夫の名前をいう。

役者が登場する場面では、「よっ、〇〇（役者の本名）」「待ってました」「〇〇（役名）頼むで」、役者の見せ場では「たっぷり」「〇〇（役名）ばかり」「よくできました」「大当たり」、恋人同士の掛け合いの場面では「御兩人」「（女性役を）大切にしろよ」、役者の出番が終わると「お疲れ様です」などという。若い衆の掛け声で観客が笑い、場が和むこともある。千秋楽では、役者の家の家業のことや、役者親をからかう掛け声などプライベートなものが多くなる。



舞台周りの若い衆（春日山）花道を支える（平成23年4月16日16:45撮影）



舞台周りの若い衆（諫鼓山）花道幕を押さえる（平成23年4月14日10:04撮影）



舞台周りの若い衆（春日山）大向うを掛ける（平成23年4月14日11:25撮影）

(4) 狂言の舞台裏

ここでは役者の世話をする役者係（月宮殿では役者方とよぶ）、衣装・鬘・化粧直しをする衣装屋・鬘屋・顔師、狂言の演出に指示を出す振付の動きを中心に見ていく。

役者係は役者につき添い、役者の世話をする。主な役割として次のことが挙げられる。①役者の移動の介助。たとえば衣装を汚さないように抱きかかえて移動したり、曳山への上げ下ろしを介助したり、衣装・鬘屋・顔師の所まで誘導したりする。②衣装屋や鬘屋の手伝い。主に小道具の装着や、衣装の片づけや移動をおこなう。③役者が衣装や鬘・化粧をいじらないように見張る。頭が痒ければ爪楊枝で掻いたりする。④役者の健康状態を確認する。

衣装屋・鬘屋・顔師は曳山の後ろに張ったテントやアトヤマ（後山・弁当山ともいう）で、衣装替えや鬘替え、化粧の直しをする。衣装替えにかけられる時間は三分程度と短いこともあり、三者が同時におこなうこともある。平成二三年の諫鼓山では、一人当たり二回の衣装替えと鬘替えがあった。これは比較的多い。衣装屋は三人、顔師は二人、鬘屋は一人だった。四月一三日の二回目の自町狂言では、まず役者係が曳山から役者を抱え下ろし、衣装屋の前まで連れていく。衣装屋が着替えさせている間に鬘屋が鬘を交換する。そして役者係が刀などの小道具を役者に装着し、最後に顔師が化粧を施し、全体を確認してから、役者係が曳山に抱え上げる。顔師が舞台裏の進行を仕切り、役者係に指示しながら役者を移動させる。

また狂言執行中、役者の次の出番まで時間がある場合は、鬘などの

調整をする。とくに祭り序盤では役者が髪を痛めることがある。役者係や顔師がなだめたり、励ましたりすることもあれば、髪屋が髪をはずして調整することもある。

振付は、狂言執行中、基本的に花道の傍に立って、狂言や観客の様子を見る。諫鼓山の振付は花道の傍に立って一緒に台詞をいったり、役者の歩く速度が遅い場合は、早く歩くように手振りや指示を出したりする。また、登場のタイミングが遅いときは、すぐに舞台裏に来て舞台後見に注意する。また、狂言が終わったあとや次の狂言執行前には振付けの修正をおこなう。振付によっては化粧や髪、衣装に細かく指示を出したり、確認をおこなったりする人もいる。(1)の準備で述べたとおり月宮殿の振付は狂言執行前に衣装や髪・化粧の確認を丹念におこなう。月宮殿の振付は前回(平成二〇年)振付を担当したときには自ら化粧を施していた。



狂言の舞台裏(諫鼓山) 役者係につき添われて出番を待つ役者(平成23年4月13日16:56撮影)



狂言の舞台裏(春日山) 狂言を見守る振付(左から四番目)(平成23年4月14日11:11撮影)



狂言の舞台裏(月宮殿) 髪を直す間役者方が日傘を差す(平成23年4月14日9:19撮影)



狂言の舞台裏(月宮殿) 役者方が役者を曳山に上げる(平成23年4月13日18:38撮影)



狂言の舞台裏（諫鼓山）衣装替え・化粧直し・髪合わせが同時におこなわれる（平成23年4月13日17:46撮影）



狂言の舞台裏（諫鼓山）アトヤマを使って衣装替えをする（平成23年4月14日10:15撮影）



狂言の舞台裏（月宮殿）狂言が終わり役者方に担がれて休憩所まで戻る役者（平成23年4月15日13:06撮影）

(5) 舞台後見

舞台後見の狂言にかかわる役割には、①狂言の進行、②役者の入退場の補助、③舞台上での役者の着替えや動きの補助、④ツケ・拍子木・木魚・烏笛・鶯笛などの鳴り物、⑤仕掛けの操作、⑥幕や照明など舞台飾りの整備、⑦舞台上の掃除、⑧囃子方へのシャギリ開始の指示などがある。また、狂言以外の場面では登り山や戻り山・狂言の待ち時間に常に舞台上で正座の姿勢で待機している。

舞台後見は基本的に若い衆がおこなう役で、二、三人が役に当たる。服装は黒紋付の着物に袴で、顔は隠さない。大歌舞伎などの舞台後見が黒衣で顔を頭巾で覆っているのとは異なる。ここでは四月一六日の自町狂言における諫鼓山を例に舞台後見の役割を見ていく。

諫鼓山の舞台後見は三人いる。例年は二人だが、平成二三年は衣装替えが多く役者の出入りが頻繁なため三人に増やしたと考えられる。仕事内容は前述したとおりだが、特筆する点として狂言の進行を状況に応じて舞台後見同士で相談して決めることが挙げられる。中老などに狂言開始前の顔見せの登場を急かされても、舞台後見は天候や役者の健康状態、衣装替えなどの進捗状況などを考慮して、要求を拒否することもある。

四月一六日は狂言執行の最終日であるため役者もすでに動線を把握しており、舞台後見に指示される前に自分で動くようになっていた。また舞台後見によると、八幡宮での狂言奉納に比べて自町狂言は落ち着いてできるため、楽屋内の雰囲気は穏やかである。

調査日	場所	時間	内容
平成二三年四月一六日	諫鼓山曳山楽屋 (曳山はオオノ角)		
10:35	小道具の確認 舞台後見(以下、後見)の一人が楽屋で小道具の確認をする。要らない物を外に出す。ほかの二人は舞台で仕掛けを取りつける。		
10:43	役者が来る時間を確認 後見が携帯電話で筆頭に役者が何時に曳山に上がるか確認する。二分後に来ると聞くと、亭にいる囃子方と、狂言の執行スケジュールと「戻り山」のタイミングは後見が指示を出すことを打合せる。		
10:47	「出笛」用のコードマイクを亭に上げる。 役者が楽屋に来る 役者が楽屋に上がってくる。後見は舞台方の子にもっと見せ場を客にじっくり見せるようにいう。		
10:55	後見は、役者を舞台に出すタイミングを見計らう。役者が楽屋に全員揃ってから舞台に出すことにする。すると、外から中老に役者はまだ出ないのかと尋ねられる。後見は、寒いからまだ役者を出しませんと答える。 役者を舞台に出し、シャギリを指示 役者を舞台に出す。そして後見が亭にいる囃子方に「シャギリって」と指示すると、囃子方は「戻り山」を鳴らし始める。 太夫の竹本朋太夫と三味線の豊澤勝二郎氏が楽屋に上がる。 役者が一人まだ曳山に到着していないが、時間に間に合わないの、舞台に出さずに狂言を始めようと、後見同士で相談して決める。		

舞台後見参与観察表 (諫鼓山)

11:00	狂言	役者はお辞儀して楽屋に戻ってくる。後見は亭にいる囃子方に「『戻り山』を」切って、『奉演間』一回」と指示する。 後見はそれぞれの持ち場につく。芝居が始まる。 太夫は立って浄瑠璃を語る。右手は柱につかまり、左手に台本を持つ。三味線は楽屋の舞台障子背面の三役台に座って三味線を弾く。太夫と三味線は舞台障子の透かし越しに舞台の様子を見て、タイミングを合わせる。なお、狂言中は楽屋襖ははずされている。 後見Aが楽屋から舞台に向かって右側の幕の上げ下げと紙吹雪を散らす係、後見Bが左側の幕の上げ下げと烏笛と鶯笛を吹く係、後見Cが囃子方への指示、役者を舞台に出すタイミングの指示、木魚を叩く係。また、全員が舞台に出て桜の木などの道具の出し入れや、笠やたすきなど役者の小道具のつけはずしをする。 他方、役者係の一人が後見の指示に従って、衣装替えの際に役者を楽屋から外へ抱えて下ろしたり、外から役者を抱え上げて楽屋に入れたりする。 役者は楽屋で出番を待つ間、じゃんけんをして遊んだり、ほかの子の台詞を口ずさむなどリラックスしている。後見が役者に出番がもうすぐだという、役者は自分で小道具を持ってきて、後見につけてもらう。そして、自分で所定の幕裏について、後見が幕を上げるタイミングで舞台に出ていく。 木魚を叩くときは、首から木魚を吊るして、太夫が使うスタンドマイクの前に立って鳴らす。笛を吹くときも、太夫のスタンドマイクを使う。鳴り物は舞台障子の透かし越しに舞台の様子を見て、タイミングを見計らって鳴らす。
-------	----	---



舞台後見（諫鼓山）舞台に仕掛けを設置する（平成 23 年 4 月 15 日 13:08 撮影）



舞台後見（青海山）役者の体勢を支える（平成 23 年 4 月 15 日 12:20 撮影）

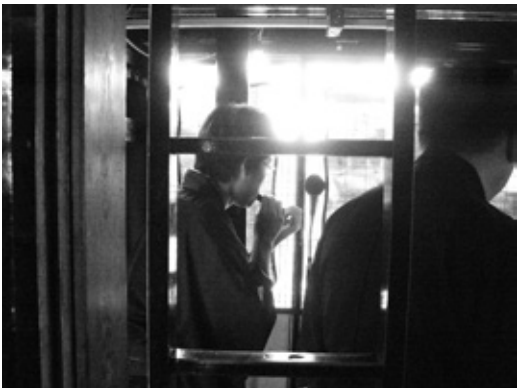


舞台後見（諫鼓山）役者に小道具をつける（平成 23 年 4 月 16 日 11:40 撮影）

11:58	11:54
片づけ 狂言が終わると、後見は胴幕を片づける。このあとに狂言をおこなう長浜文化芸術会館に持っていく物を一覽表を見ながら道具箱にまとめる。 なお、後見は狂言終了時に囃子方へシャギリ開始の合図は出さない。囃子方がタイミングを見計らって始める。 舞台での挨拶が終わった役者たちは、慣れた様子で楽屋をとおって曳山から下りていく。「あいづら凄いな。出番が終わったら自分らで勝手にばーって曳山を下りよる。でも慣れてきた頃に（祭りは）終わる（後見C）。」 後見はシャギリの終わるタイミングはとくに指示をせず、小道具を持って曳山を下りる。	



舞台後見（諫鼓山）透けた舞台障子で外の様子を見ながら花吹雪を散らす（平成 23 年 4 月 16 日 11:22 撮影）



舞台後見（諫鼓山）舞台の様子を見ながら鶯笛を吹く（平成 23 年 4 月 16 日 11:22 撮影）



舞台後見（諫鼓山）面幕を開けて役者を楽屋に入れる（平成23年4月16日11:17撮影）



舞台後見（月宮殿）仮縫いしてある糸を抜いて、衣装を一時にしてかえる（ブッカエシ）（平成23年4月16日10:16撮影）

(6) シャギリ

曳山祭でのシャギリ演奏は基本的には表「長浜曳山祭囃子次第」によっておこなわれる。ここでは狂言の執行に合わせて演奏される状況を出番山で見えていく。

シャギリの演奏場所は基本的には曳山の亭だが、女子や亭に入りきらない男子は曳山の周りである。なお、「出笛」と「神楽の出」は曳山の楽屋の舞台障子裏で吹くことになっているが、現在はコードマイクを亭に上げて吹く山組もある。

【春日山（本町組）】

一番山の春日山では狂言の前に三番叟が舞われる。四月一五日の神輿還御までは、「御遣り」「奉演間」の順に演奏すると、三番叟が舞われ、

終わると「出笛」が吹かれる。その後狂言が始まり、舞台方が口上を述べる。狂言が終わると「神楽」を演奏し始める。なお、八幡宮と御旅所の両神前では、狂言前の「御遣り」のかわりに「神楽」を演奏する。そして四月一六日は、「御遣り」のかわりに「戻り山」を演奏する。亭に上がるのは男性のみである。この年は大体三人くらいが上がった。そのほかは曳山の周りで演奏した。亭の囃子方が演奏し始めると、曳山の周りにいる囃子方が、続いて吹く。しかし亭の囃子方の人数が少ないため、外まで音が届かないこともある。指示は、曳山の横にいる若い衆の囃子担当が携帯のメールで亭にいる囃子方に出した。自町狂言では、「出笛」は曳山の横などに設置したスタンドマイクで鳴らすこともある。女子が吹くこともある。

【月宮殿（田町組）】

基本的に囃子方が「獅子」を演奏すると役者が舞台に出て、客に顔見せをする。役者が楽屋に引き、しばらくすると「ナナシ」にかえる。準備が遅れる場合は「獅子」や「ナナシ」を繰り返し演奏し延ばす。準備が整うと「出笛」が演奏される。「出笛」が終わると、三味線が鳴り始め、狂言が開始される。狂言が終わると、太夫と三味線が鳴り終わる直前に少し重ねて「獅子」を演奏し始める。狂言の幕切れで拍子木を打ち終わると、すぐに「獅子」を演奏し始める。

亭には七〇〇人程度上がる。そのほかは曳山の周りで演奏する。指示系統は副筆頭から囃子方総責に指示し、それから亭にいる囃子方にシャギリ開始を合図する。また、準備が遅れている場合は、舞台後見が囃子方総責に「獅子」や「ナナシ」の演奏を延ばすよう依頼する

こともある。

【青海山（北町組）】

四月一三日の自町狂言では、「豊公楽」・「太平楽」の順に演奏される。その後舞台方が口上を述べる。そして「出笛」を鳴らし終わると、狂言が始まる。狂言が終わると「神楽」を演奏する。

亭に上がるのは男性のみである。大体六人程度亭に上がる。そのほかは曳山の周りで演奏する。太鼓は亭の上で叩かれる。すり鉦は亭のなかと曳山の外の両方で叩かれる。指示は、筆頭から囃子部長に出し、そして亭にいる囃子方にシャギリ開始の合図を出す。ただし狂言が終わったあとのシャギリ開始の合図はとくになく、亭にいる囃子部が狂言の終了を見計らって始める。曳山の周りにいる囃子部は、亭にいる囃子部の演奏が始まるとそれに合わせて演奏する。

【諫鼓山（御堂前組）】

役者が顔見せのため、狂言上演前に舞台に出ると囃子方が「御遣り」を演奏し始める。役者が全員舞台上に揃い、太夫・三味線も準備が完了すると、役者はお辞儀をして再び楽屋に引く。すると囃子方は、曲を「奉演間」にかえる。「奉演間」が終わると、「出笛」を吹く。「出笛」を吹き終わると、三味線の音が鳴り始め、狂言が開始される。狂言が終わり、子どもが挨拶をすると、太夫と三味線が鳴り終わる前に切り笛から「神楽」を演奏し始める。もし狂言終了後に曳山が動く場合、「神楽」を止め、「御遣り」を演奏し始める。そして、曳山が止まるまで「御遣り」を演奏し続ける。なお、八幡宮と御旅所では、狂言前の「御遣り」のところで「神楽」を演奏する。また、「奉演間」は基本的に一段のみ

演奏するが、準備状況に応じて二段以降も演奏することがある。ちなみに、平成二三年はすべて一段までだった。

亭に上がるのは男性のみで、七～一〇人程度である。そのほかの人は曳山の周りで演奏する。

指示は、楽屋にいる舞台後見が亭にいる囃子方にシャギリ開始の合図を出す。ただし狂言終了後のシャギリ開始の合図はなく、亭にいる囃子方が狂言の終了を見計らって演奏し始める。シャギリが終わるタイミングも亭にいる囃子方の判断で決められることが多い。

「出笛」は亭に上げたコードマイクで音を拾う。四月一六日は、「御遣り」のかわりに「戻り山」を演奏する。



シャギリ（春日山）御旅所で演奏する（平成23年4月15日撮影）



シャギリ（諫鼓山）亭の内部（平成23年4月14日12:01撮影）

	場 所	曲 目 順	備 考
13 日	自町	起し太鼓	自町を歩いて演奏する。
	自町狂言	1. 御遣り	
		2. 奉演間	狂言開始前。
		3. 出笛	狂言開始直前。
		4. 神楽（「切り笛」から）	狂言終了と同時に開始する。
14 日	自町狂言	13 日と同じ	
	登り山	1. 御遣り	自町から八幡宮のすじかい橋まで。
		2. 神楽（「神楽の出」から）	すじかい橋での神前曳入れから所定の場所に据えつけ完了まで。
		3. 奉演間（おちつき）	曳山据えつけ完了時に 1 回演奏する。
	四・三・二番山の場合 （迎えシャギリ）	1. 神楽	次の曳山がすじかい橋を入り、所定の場所に据えつけられるまで。
		2. 奉演間（おちつき）	次の山組が据えつけを完了し、「奉演間」を囃し出したときに 1 回演奏する。
	夕渡り（送りシャギリ）	1. 神楽	四・三・二・一番山の順に囃し始める。四番山は「切り笛」から夕渡りが境内を出るまで。
15 日	自町	起し太鼓	自町を歩いて演奏する。
	八幡宮 （一番山の場合）	1. 神楽（「神楽の出」から）	太刀渡りが神前を出ていくときの「翁招き」から曳山が狂言奉納場所へ据えつけられるまで。
		2. 奉演間	据えつけ完了時から狂言開始前まで。
		3. 出笛	狂言開始直前。
		4. 神楽（「切り笛」から）	狂言終了時からすじかい橋を出るまで。
	二・三・四番山の場合 （送りシャギリ）	1. 神楽	前の曳山が狂言奉納場所に出るときから据えつけが終わるまで（一番山が出るときは各山組とも）。
	二・三・四番山の場合	1. 神楽	自町の曳山が奉納場所へと曳き出されるときから奉納場所へ据えつけられるまで。
		2. 奉演間	据えつけ完了時から狂言開始前まで。
		3. 出笛	狂言開始直前。
		4. 神楽（「切り笛」から）	狂言終了時からすじかい橋を出るまで。
	八幡宮から御旅所 （道中二回上演）	1. 御遣り	すじかい橋を出て、次の狂言上演場所へ着くまで。
		2. 奉演間	上演場所到着後、狂言開始前に。
		3. 出笛	狂言開始直前。
		4. 神楽（「切り笛」から）	狂言終了時から曳山が動くまで（動いてからも「神楽」の曲のきりがつくまで演奏する）。
	御旅所	5. 御遣り	原則として曳山が動き出したときから次の上演場所に着くまで。
		1. 神楽（「神楽の出」から）	みのり橋での御旅所曳入れから奉納場所据えつけ完了まで。
		2. 奉演間	据えつけ完了時から狂言開始直前まで。
		3. 出笛	狂言開始直前。
		4. 神楽（「切り笛」から）	狂言終了時から所定の場所に据えつけられるまで。
	一・二・三番山の場合 （迎えシャギリ）	5. 奉演間（おちつき）	据えつけ完了時に 1 回（短くてもよい）。
		1. 神楽	次の曳山がみのり橋を入り、奉納場所へ据えつけられるまで。
		2. 神楽	次の山組が狂言終了後、所定の場所に据えつけられるまで（次の山組の「神楽」より少し遅れて始める）。
	戻り山	3. 奉演間（おちつき）	次の曳山が所定の場所に据えつけ完了し、「奉演間」を演奏し始めた時に 1 回（短くてもよい）。
		1. 戻り山	神輿を担ぎ始めたとき、一・二・三・四番山の順に囃し始め、自町内に戻るまでおこなう。
16 日	自町での後宴狂言	1. 戻り山	
		2. 奉演間	13、14 日の自町狂言の要領と同じだが、「御遣り」にかわって「戻り山」を演奏する。
		3. 出笛	
		4. 神楽（「切り笛」から）	

長浜曳山祭囃子次第（囃子保存会の曲を演奏する山組）『長浜曳山しゃぎり』より修正加筆

(7)千秋楽

千秋楽は四月一六日の一九時半頃から各町内でおこなわれる祭り最後の狂言である。千秋楽では町内の人を笑わせる台詞や、若い衆からの掛け声など町内の人が楽しむ趣向が加えられることが多い。これらの演出は若い衆がおこない、振付が関与することは基本的にない。さらに千秋楽のあとには、役者や三役への花束贈呈や、筆頭や若い衆を卒業する人を労う催しなどがおこなわれる。ここでは月宮殿と諫鼓山を例に千秋楽の様子を見ていく。

【月宮殿（田町組）】

狂言が始まる前、これまでであれば役者は楽屋の後ろから曳山に上がるが、千秋楽では筆頭の紹介を受けて観客が見守るなか、舞台の前から梯子を掛けて上がる。また幕開けの太夫の語りで「千秋楽」という浄瑠璃が入る。狂言中は、台詞を役者の家の家業や、稽古中の失敗にまつわるものにかえて、観客の笑いを誘う。狂言後は筆頭を労う余興がおこなわれる。余興の内容は、若い衆や囃子方が祭り期間中に酒を飲みながら交わされる雑談のなかから考えられたものが多い。最後に振付・筆頭・正負担人によって挨拶がなされ千秋楽は締めくくられる。

調査日	平成三年四月一六日
場所	田町会館西側
時間	19:01
内容	曳山は田町会館の西側に配置。南を正面に向ける。囃子方総責の指示で駐車場にハヤシマルを据え囃子方が整列し「獅子」を練習する。この時点で笛担当が一人、太鼓・すり鉦が一人ずつ。囃子方の隣では月宮殿の手拭いやパンフレットが販売されている。 田町会館内では役者たちが化粧や衣装の準備をする。

千秋楽参与観察表（月宮殿）

19:44	19:41	19:30	19:27	19:15	19:12	19:02	19:01
・八重桐が石鉢を投げるシーンに小舞台が参加し、石鉢を何度も投げ合う。 ・お茶ひとつとお酒ひとつ ・荻野屋八重桐↓萩野屋八重桐（稽古中、若い衆の一人が萩と萩を読み間違えたことになむ） ・煙草屋源七↓ケーキ屋源七（源七役はケーキ屋の息子） ・狂言は千秋楽用にアレンジが加えられている。稽古中のエピソードや役者の名前にちなんだ改変もされ、事情を知る若い衆や自町の人々のみに通じるネタが多い。改変されたネタを以下に列挙する。 ・狂言は千秋楽用にアレンジが加えられている。稽古中のエピソードや役者の名前にちなんだ改変もされ、事情を知る若い衆や自町の人々のみに通じるネタが多い。改変されたネタを以下に列挙する。	囃子方が「ナナシ」・「出笛」の順に演奏する。 「出笛」が鳴り終わり、狂言が開演する。太夫の幕開きの三重が「千秋楽」と千秋楽仕様に変わる。出番のない役者や鬘屋・衣装屋などは田町会館のガラス戸越しに様子を見る。	役者が楽屋に入る。 後見が紹介される。	周りにいる若い衆や観客がヨイサの掛け声で役者を迎える。その後、舞台後見が紹介される。 き、舞台上上がる。 紹介・役者紹介をする。役者は紹介のあった順に一人ずつ曳山まで歩いていき、舞台上上がる。 一方、曳山の付近には観客として自町の人々が多く集まってくる。 曳山前で副筆頭が開演の挨拶をする。続いて筆頭が挨拶・外題紹介・三役紹介・役者紹介をする。役者は紹介のあった順に一人ずつ曳山まで歩いていき、舞台上上がる。	役者全員が田町会館近くの若い衆宅の車庫へ行き、記念撮影をする。その後、曳山の左右に整列する。	観客の一部にクラッカーが渡される。 役者が田町会館から出てきて、田町会館前に停められたアトヤマに乗せられる。	囃子方が「獅子」を演奏し始める。	田町会館の横で町内の女性たちが観客に甘酒を振舞う。

21:38	21:00	20:57	20:55	20:50	20:38	20:35	20:29	20:28	20:26	20:24	20:23
中老が曳山を山蔵に納める。	囃方総責が囃子方を集め、反省会をする。	自然と若い衆から「月宮殿！」の掛け声が沸き起こる。	曳山の前で役者方が役者を肩車し記念撮影をおこなう。そして役者は田町会館へ着替えにいくと、舞台後見二人と筆頭と副筆頭が記念撮影をする。	役者を曳山から下ろす。	その後、筆頭と正負担人が挨拶をする。最後に副筆頭から閉幕の言葉がある。	舞台上で筆頭から役者・三役・囃屋・顔師・衣装屋に花束が贈られる。	振付から挨拶がある。「次回私が元気でしたらもつとよいお芝居を作りたいと思いますのでよろしくお願いします。」	若い衆五人が、裸参りの格好で田町会館近くの若い衆宅から出てきて水をかぶる。	狂言が終了すると、舞台後見がクラッカーを役者に手渡し、役者は観客とともにクラッカーを鳴らす。	囃子方は狂言が終わると「獅子」を演奏していたが、急にアニメの曲にかえる。これは一五日の朝方に起し太鼓に行く際に囃子方が遊びで練習していたものである。	これまで狂言のクライマックスのシーンで太鼓と笛の囃子を担当していた若い衆ではなく、囃子方の大学生二人が舞台の前に出てきて太鼓と笛を担当する。

【諫鼓山（御堂前組）】

囃子方は全員曳山の外で演奏する。曳山のシャギリヤタイを出し、そのなかで太鼓を叩く。一五日の神輿還御以降、狂言執行前に演奏される「御遣り」を「戻り山」にかえて演奏する。また「出笛」は女子がおこなうこともある。

狂言中に若い衆や中老から掛けられる大向うがこれまでも多い。大向うの内容は、役者の家族に関するものが多くなる。たとえば、役者が台詞で「念入りにお化粧しています」といえば、「お前の母さんも！」と大向うが入る。大向うに対して観客から笑いが起きることもある。また、役者の振りや衣装が一部かわる。たとえば、途中で死んだ役の役者が最後に再度登場するが、このときに頭に天冠（三角の白い布）をつけて出てくるなどである。なお、役者の振りの変更は若い衆が指示したもので、振付は関与しない。

狂言終了時には曳山の周りにいる若い衆が盛大に桜吹雪を降りまく。花吹雪や拍手で曳山の周りは熱気に包まれる。

狂言終了後、中老の一人が曳山の舞台に向かって付祝言として「高砂の謳い」をうたう。その後、囃子方が「神楽」を二回繰り返して演奏する。「神楽」が止むと、副筆頭の司会で三役紹介・筆頭挨拶・役者の紹介がある。役者には役者の親から花束が渡される。その後卒業する若い衆の挨拶と胴上げがおこなわれ、最後に負担人が挨拶をして、万歳三唱をする。囃子方が「戻り山」を演奏するなか、役者は役者係に担がれて町家に戻っていく。



千秋楽（春日山）舞台後見が狂言に参加して観客の笑いをとる（平成23年4月16日20:48撮影）



千秋楽（月宮殿）役者が一人ずつ観客の間を練りあるく（平成23年4月16日19:31撮影）



千秋楽（月宮殿）狂言終了後クラッカーが鳴らされる（平成23年4月16日20:25撮影）



千秋楽（諫鼓山）花道の周りにいる若い衆が狂言に参加して観客の笑いをとる（平成23年4月16日20:25撮影）



千秋楽（月宮殿）筆頭を労う（平成23年4月16日20:34撮影）



千秋楽（月宮殿）観客の前で演奏する囃子方（平成23年4月16日19:05撮影）



千秋楽（諫鼓山）若い衆を卒業する人を胴上げる（平成23年4月16日21:15撮影）



千秋楽（月宮殿）役者が役者方に担がれて記念撮影をする（平成23年4月16日20:56撮影）

第九項 登り山

登り山は一日の自町狂言の後、各山組の町内から八幡宮へ曳山を曳いていく行事である。一四時半頃に四番山が八幡宮に到着し、その後、三番山・二番山・一番山の順に三〇分おきに八幡宮に到着する。曳山の舞台に役者および舞台後見を乗せる。長刀山は一五時半頃御旅所に行く。

シャギリは自町から八幡宮の敷地の手前にあるすじかい橋まで「御遣り」・「獅子」・「豊公楽」などの道中の曲を鳴らし、すじかい橋を渡たり八幡宮の敷地に入ると、「神楽」・「祇園囃子」などの神前入りの曲を鳴らす。そして、指定の場所に曳山が着くと「奉演間」・「太平楽」・「ナナシ」などの落ち着きの曲を鳴らす。さらに、次番山の神前入りに対して、先に神前入りしている山組のシャギリは「神楽」などで迎える。なお、参道および神前では、神様を見下ろしてはいけないということ、で囃子方は亭から顔を出したり張出（ベランダのようになった所）に出ることを慎む決まりがある。

曳山を曳く山曳きは、例年ボランティアや自衛隊などがおこなうが、平成二三年は自衛隊が東日本大震災の被災地に救援に行っていて、人が少ないため暇番山の若い衆や中老が中心となっておこなった。出番山の若い衆や中老は山曳きをしない。

【春日山（本町組）】

一三時、駅前通りの曳山が据えつけられている所にシルバー人材センターから入行が、また高砂山・常磐山・壽山・孔雀山から若い衆などが山曳のボランティアとして集合した。一三時半に負担人から挨拶および日程・注意事項の説明がある。平成二三年は東日本大震災な

どの社会情勢を鑑みてお神酒はなかった。一四時一〇分役者が曳山の舞台に上がった。一四時二〇分、亭の上にいる囃子方が「御遣り」を演奏し始めると、続いて亭に上がらず曳山の後ろについている囃子方が「御遣り」を始めた。一四時二四分出発する。曳山の後ろにはベントウヤマ（弁当山）という荷物などを入れる小型の曳山が続く。駅前通りを東へ、北国街道との交差点を北に入って札の辻から大手門通り・宮町通りを東へ行く。一旦大手橋を渡ったところで休憩をする。しかし囃子方は休憩せずに「御遣り」を鳴らし続ける。一五時一五分八幡宮前のすじかい橋前で曳山が止まり、シャギリも止まった。一五時三四分八幡宮で春日山を紹介するアナウンスが入った。一五時三七分亭の囃子方が「神楽の出」を始め、曳山を八幡宮に曳き入れた。囃子方は「神楽の出」から「神楽」を続けて演奏する。曳山の後ろについている囃子方も「神楽」を吹こうとするが、迎えシャギリをする月宮殿の「祇園囃子」につられてしまい吹けない。一五時五八分曳山が所定の位置に据え付けられ、囃子方は落着きの曲として「奉演間」を演奏した。一六時二分負担人は先に八幡宮に着いている月宮殿に挨拶し、解散した。役者たちは若い衆に肩車をされたり抱きかかえられたりして参集殿に行く。

囃子方の人数は子どもを中心に一人。亭に三人、曳山の後ろについて歩く人が八人。山曳きは約四〇人。うち約五人はベントウヤマを曳く。

【月宮殿（田町組）】

一一時二三分、午前の自町狂言が終わり役者は休憩をとった。一二

時二〇分頃、田町会館の角へ山曳きをするために萬歳樓・狸々丸から合わせて約三〇人の若い衆が来る。一方、一二時半頃から役者の着付け・化粧・鬘合わせをする。終わると曳山の舞台に再び上がる。一二時五五分負担人の挨拶および山曳きの統括をする綱先取締役から注意事項の連絡があった。その後山曳きらにお酒・おつまみが配られ乾杯をする。一三時一〇分、亭にいる囃子方が「獅子」を演奏し始めると、隊列を組み、八幡宮に向けて出発する。「ヨイサ、ヨイサ」の掛け声をしつつ、田町会館から一旦東に向かい長浜図書館前の交差点から北へ行き、一つ目の辻を北国街道まで西進する。北国街道を右折し、大手門通りとの交差点である札の辻まで北進する。札の辻を右折し、大手門通り・宮町通りを直進し八幡宮まで向かう。一五時すじかい橋に着くと、囃子方は「獅子」を止める。神前入りのために面幕を整えるなど曳山を正装する。一五時一二分、八幡宮で月宮殿の説明および神前入りのアナウンスが入ると、囃子方が「祇園囃子」を演奏し始める。そして先に着いていた三番山の青海山による迎えシャギリと招き扇に迎えられ、月宮殿が神前入りする。一五時半、曳山が定位置に据えつけられ、囃子方はシャギリを止めた。役者は曳山から下り休憩のため参集殿へ行く。一五時三五分頃春日山が神前入りをするため、囃子方は「獅子」で迎えシャギリをした。

【青海山（北町組）】

平成二三年は、一三時に町内の北源辻から登り山を開始した。登り山を始める際に清めの塩をまく。囃子方は自町から八幡宮まで「豊公楽」を演奏し続ける。一三時五〇分頃青海山が八幡宮のすじかい橋付

近に到着する。囃子方は「太平楽」を演奏したのち、神前入りの時間まで休憩をとる。一四時三〇分神前入り。囃子方は「神楽」を演奏する。一四時五〇分頃曳山が所定の位置に据えつけられた。囃子方は落ち着きの曲として「太平楽」を演奏し、休憩する。一五時一七分月宮殿が神前入りするので、囃子方は迎えシャギリとして「神楽」を演奏する。若い衆らは「ヨイサ、ヨイサ」の掛け声とともに招き扇した。一五時三五分月宮殿が所定の場所に据えつけられ、迎えシャギリと招き扇を止めた。

【諫鼓山（御堂前組）】

午前におこなわれた自町狂言が終わると、登り山の準備を始める。山曳きは山組外から公募したボランティアのほかに、翁山と鳳凰山の若い衆も参加した。出発前、中老の一人の申し出により「弓八幡」の謡いがおこなわれたあと、一二時二〇分頃八幡宮へ向かって曳山を曳き始めた。隊列は人行事を先頭に負担人・若い衆・曳山・囃子方・アトヤマ（ベントウヤマともいう）の順に並ぶ。

若い衆はみな羽織袴だが、中老は羽織袴姿の人は少なく、曳山の飾り付けなどをするため動きやすい洋服の人が多い。囃子方と山曳きは洋服にハッピを羽織る。役者は狂言の衣装を着る。

囃子方は道中「御遣り」を鳴らし、八幡宮に入るときは、まず「神楽の出」を演奏し、続けて「神楽」を演奏する。曳山が所定の場所に据えつけられると、落ち着きの曲として「奉演間」を一段演奏する。最後に、次に神前入りする青海山を「神楽」を演奏して迎える。シャギリで迎えることを迎えシャギリという。

調査日	時間	内容
平成二三年四月一四日	11:50	午前中におこなわれた自町狂言が終わり、曳山は大通寺の表参道とゆう壺番商店街の交差点のオオノ辻に据えつけられたままにしている。亭には登り山に備えて、すでに男子の囃子方が八人上がっている。亭内だけでなく亭の外側の張出にも四、五人いる。亭の中から芝居の様子は見えないため、舞台後見からシヤギリを始める指示がない場合は耳を頼りにシヤギリを始める。 舞台上では舞台後見が幕の位置を直したり、登り山の間舞台上に置かれた小道具が倒れないように片づける。 曳山に役者が上がる。後見と役者が舞台上で並ぶ。
12:10	12:20	山曳きにボランテアがやってくる。ボランテアのなかには翁山や鳳凰山の人もいる。中老はボランテアに日本酒とかまぼこを振舞う。 中老が八幡宮へ出発する指示を出す、各自定位置につく。
12:21		曳山を曳き始める。順路はゆう壺番街・博物館通り・大手門通り・宮町通り・八幡宮である。中老と若い衆・曳山・囃子方・アトヤマの順に練りあるく。曳山の舞台では舞台後見と役者が座る。アトヤマには、休憩用の飲み物や、狂言で使う小道具がしまわれている。曳山のうしろについている囃子方は一四人で全員女子である。「御遣り」を吹きながら曳山と約三メートル間隔を空けてついていく。囃子方は大体四列になって歩く。一番前を歩くのは中学三年生くらいの子。二列目に中学一年生と小学生、三列目に鳳凰山、四列目が大人。一番後列の者が、隊列のペースが遅れないように小中学生を誘導する。

登り山参与観察表（諫鼓山）

13:05	13:15	13:20	13:30	13:37	13:38	13:55
曳山の上では舞台後見が子どもたちの面倒をみている。舞台では役者と舞台後見が、ヨイサ、ヨイサの掛け声に合わせて扇子をあおぐ。亭にいる囃子方の子どもは、下に向かって手を振って遊ぶ。 時間調整のため宮町通りで休憩。囃子方は疲れた様子で日陰に座りお菓子を食べる。亭の上にいる囃子方の男子が、下にいる囃子方の女子に話しかける。下の女子は亭の上の男子に向かって「偉そうにして」と亭に上されることをうらやましがらる。 一方中老や若い衆は休憩中に日本酒を飲む。 中老が囃子方に「頼んます」というと囃子方は再び「御遣り」を始める。 そして曳山が動き始める。	八幡宮の入り口のすじかい橋前に到着する。	すじかい橋の前で一時停止する。その間若い衆はアトヤマから飲み物を取り出す。一方囃子方は「御遣り」を鳴らし続ける。すじかい橋にある松の枝が曳山に引つ掛かるので、中老が亭に上がって棒で松の枝をよける。	すじかい橋の上で曳山を止める。舞台後見が御簾を掛ける。	亭に上がった中老が「シヤギリを止めますよ」と下にいる中老に伝え、その後「御遣り」をひととおり最後まで吹いてから止める。囃子方は飲み物を飲んで休憩する。亭の上のいた囃子方の男子も下りてくる。	中老は曳山の飾りつけをする。屋根の上に飾りをつけ、朝鮮幟の先に剣をつける。曳山がとおりやすいようにすじかい橋の上に伸びた松の枝を伐り落とす。また、中老は囃子方の子どもたちにお茶を振舞う。 役者は役者係に抱えられて、近くにある知り合いの民家にトイレを借りていく。	振付の水口氏がやってきて、囃子方の子どもたちと雑談をする。囃子方の女子も振付を知っているのか「先生」といって話しかける。

14:45	14:32	14:28	14:01	14:00	
シャギリが終わると、囃子方は一時解散する。	青海山の曳山が来ると囃子方は「神楽」で迎えシャギリをする。青海山の曳山が所定の場所に据えつけられると、囃子方は「神楽」を吹き終える。青海山の囃子方はその後「奉演間」を吹く。	役者を曳山から下ろし参集殿へ連れていく。舞台後見は登り山で傾いた幕を直す。その後、後見三人のうち二人が舞台に正座する。もう一人の舞台後見は下りて休憩する。その後三人は交代で舞台に正座して曳山の番をする。囃子方はその場で待機する。	「神楽」が終わると、囃子方の子どもたちは「やったー」といって喜ぶが、直後「奉演間」が始まる。囃子方は「えー」といって不満顔で「奉演間」を吹き始める。「奉演間」を一段吹いてシャギリが終了する。	囃子方「神楽の出」を吹き始める。曳山が動き出し神前入りする。曳山が境内に入る頃「神楽の出」が終わり、そのまま続けて「神楽」を吹く。曳山が所定の場所に据えつけられる。下にいる中老が、亭にいる中老に腕で丸を作り合図をする。それを見た中老は囃子方にシャギリを終えるよう指示する。	後ろから青海山の曳山もやってきて、待機している。 囃子方の男の子が曳山に戻っていく。八幡宮では亭の張出に出てはいけないので、亭に入りきれない子どもたちは曳山の楽屋で吹く。 それぞれ持ち場につく。



登り山（諫鼓山）役者と舞台後見が掛け声に合わせて扇をおぐ（平成 23 年 4 月 14 日 12:59 撮影）



登り山（諫鼓山）休憩のため子どもを移動させる（平成 23 年 4 月 14 日 13:51 撮影）



登り山（月宮殿）八幡宮に向けて出発する（平成 23 年 4 月 14 日撮影）



登り山（諫鼓山）亭の上と曳山の後ろについて演奏する囃子方（平成 23 年 4 月 14 日 13:21 撮影）



登り山（諫鼓山）曳山の前で若い衆が招き扇をする（平成23年4月14日13:02撮影）



登り山（諫鼓山）神前入りのため中老が曳山を正装する（平成23年4月14日13:43撮影）



登り山（春日山）ベントウヤマで役者が休憩する（平成23年4月14日14:49撮影）

第二〇項 夕渡り

夕渡りは、一四日午後七時頃から役者が衣装を着て、八幡宮から大手門通りと博物館通りの交差点である一八屋辻まで練りあるく行事である。役者の顔見世でもある。

一八時半頃から行列の準備をして、一八時五〇分頃から、四番山から各曳山の亭にいる囃子方が「神楽」などの送りシャギリを鳴らし始める。その後三番山・二番山・一番山の順に送り囃子を重ねていく。午後七時頃、囃子保存会のシャギリ・總當番副委員長・長浜市長などの祭典参与および来賓・總當番委員長・四番山・三番山・二番山・一番山の順に隊列を組んで一八屋辻まで渡る。

一例として二番山の月宮殿の隊列の順を以下に記す。人行事・提灯持ち・負担人・筆頭・榊持・御幣持・小舞台・源七役・月宮太郎役・太田十郎役・沢瀉姫役・八重桐役。なお、小舞台は井伊家から拝領した能面の入った箱を持って渡る。各役者の横には役者方の若い衆などが並ぶ。役者の並び順は振付が決める。必ずしも年齢順や重い役の順というわけではない。舞台後見は一番山の夕渡りがすじかい橋を渡り終えるまで曳山の舞台上で着座し続ける。送りシャギリも一番山がすじかい橋を渡り終えるまで鳴らし続ける。

役者は基本的に狂言が終わったときの衣装で歩く。女形・立役それぞれの歩き方で歩き、途中で見得を切ることもある。十数メートル歩いては、床几に腰かけて休息する。役者の警護は若い衆・中老が当たる。役者前警護は足元を提灯で照らし、役者の警護は役者の顔を照らす。一時間余りかけて一八屋辻まで行き、その後は普通の足取りで自町に



夕渡り(春日山) 八幡宮から出発(平成23年4月14日撮影)



夕渡り(春日山) 舞台方は井伊家から拝領した能面を持つ。両脇には役者方と役者親が並ぶ(平成23年4月14日撮影)

戻る。

なお、平成二三年は大震災による自粛のため、囃子保存会のシャギリ・祭典参与および来賓は参加しなかった。沿道には例年暇番山による迎えシャギリがおこなわれるが、本年は自粛のため「ヨイサ、ヨイサ」の掛け声のみであった。また例年は曳山の幟、見送り幕の入った長持を持って渡るが、本年は自粛のためおこなわなかった。

夕渡り後、翌日朝まで曳山の警備が警備会社によってなされるが、月宮殿・諫鼓山は中老が曳山に泊って警備をしている。



夕渡り(春日山) 道中、役者は見得を切る(平成23年4月14日撮影)



夕渡り(月宮殿) 沿道で暇番山の萬歳樓が掛け声と提灯で迎える(平成23年4月14日20:01撮影)

第二項 春季例大祭

春季例大祭は四月一五日の朝七時から八幡宮でおこなわれる行事である。これに總當番委員長が出席する。なお、春季例大祭に先立ち、六時半までに中老が八幡宮に置いていた曳山に覆っていたシートをはずし、山飾りをする。

第二二項 朝渡り

朝渡りは四月一五日の朝に役者が各町内から八幡宮まで練りあるく行事である。五時頃から町内の会所で着付けや化粧をする。七時半頃に各町内を出発して夕渡りの順路を逆に進み、八時半までに八幡宮に到着する。到着したら参拝し、總當番に挨拶をして記帳する。



朝渡り（月宮殿）（平成23年4月15日7:15撮影）



朝渡り（月宮殿）（平成23年4月15日7:23撮影）

隊列は人行事（金棒）・陣提灯持ち・負担人・御幣使（御幣持）・役者・役者係・正副筆頭・中老の順に並ぶ。さらにそのあとに衣装屋や顔師がついていくこともある。役者係は各役者の両側に並ぶ。役者は狂言を始めるときの衣装を着て普通の歩調で歩く。役者のなかでも年齢の低い子どもは参加しない山組もある。なお、諫鼓山の人行事は例年シルバー人材センターから派遣された人がしていたが、平成二三年は、朝が早く対応が大変なことから経費削減などの理由から中老がおこなった。

狸々丸（船町組）の場合は、行列の先頭に曳山に飾る七つ道具などを用いた奴振りが加わる。奴振りは米原市長沢の福田寺公家奴振保存会がおこなう。

第三項 太刀渡り

太刀渡りは朝渡りのあとに長刀組（小舟町組）が八幡宮まで練りあるく行事である。九時一〇分頃八幡宮の一の鳥居前に到着した長刀組を總當番正副委員などが出迎え、九時二〇分頃拝殿を巡って長刀席に着く。

渡りは大きな金幣を先頭に、力士・子どもの鎧武者などが続く。金幣・力士・鎧武者の脇には警固がつく。力士の衣装は紋付きの着物に角帯をしめ、着物の裾からげをして、臀部を見せ、前には化粧廻しをして、手に青竹を持つ。鎧武者の衣装は鎧や母衣をつけ、太刀や大太刀をつける。

第四項 翁招き

翁招きは太刀渡りのあと、八幡宮神前狂言奉納開始の合図（神前を退いたという退列の合図でもある）をする行事である。

九時半頃長刀組が長刀席に着くと、總當番委員長は狂言執行の挨拶をする。その後、長刀組負担人への挨拶が済むと、太刀渡りは御旅所に向かって出発する。隊列の最後尾が手水舎の前で一時停止すると、長刀組の翁招き行事者が、「最初長刀組」と書かれた席札を先につけた約三・八メートルの竿を本殿に向かって三度招いたあと、一番山の曳山の方に差し向ける。一番山は竿を差し向けられると、直ちに囃子方が「神楽」を鳴らし始める。二番山以下も続いて「神楽」を始める。長刀組の太刀渡りは「神楽」が始まると再び御旅所に向けて歩き始める。そして一番山は舞台を整え、狂言奉納場所へ曳山を動かす。

なお、平成二三年は翁招きの前に東日本大震災の犠牲者に対して黙

とうが捧げられた。

第五項 神輿還御

神輿還御は、四月一五日に御旅所から八幡宮へ神輿を還す行事である。例年だと御旅所での四番山の狂言が終わり、四番山席への据えつけが完了すると、七郷の若い衆が神輿堂から神輿を担ぎだして八幡宮へ向かうが、平成二三年は大震災による自粛のため、神輿のかわりに真榊を使った。

囃子方は、神輿が御旅所神輿堂の縁を切ったとき、一番山から順に戻り山のシャギリを開始する。

第六項 戻り山

戻り山は、神輿還御のあと、長刀組および出番山の曳山を自町の山蔵に戻す行事である。二時半頃長刀組・一番山・二番山・三番山・四番山の順に曳き出され、遅い所でも二三時半頃に山蔵や山泊り場所に納められる。囃子方は曳山が山蔵に納められるまで「戻り山」などの戻り山のシャギリを鳴らし続ける。なお、戻り山では役者は先に町内に戻っているため、曳山の舞台には舞台後見のみ座っている。

一番山の春日山は囃子方が「戻り山」を演奏するなか、二時五十分頃に御旅所を出発した。二時一〇分曳山が山蔵に納められた。

二番山の月宮殿は囃子方が「獅子」を演奏するなか、二時五六分御旅所を出発した。二三時三〇分頃曳山が翌日一回目に狂言がおこなわれる岩崎席の前に到着した。囃子方は落着きの曲として「ナナシ」を演奏する。かつて戻り山は角を止まらずに勢いよく曲がり観客に喜

んでもらっていたが、月宮殿は平成二三年の祭り直前まで曳山の修理をおこなっていたため、曳山の扱いがさらに丁寧になり、勢いよく角を曲がることなどはなくなった。

三番山の青海山は囃子方が「戻り山」を演奏するなか、二時過ぎに御旅所を出発する。二時二五分、相生会議所手前の駐車場で曳山を停めた。なお、戻り山的时候は、囃子部が遊びでシャギリを「戻り山」から「豊公楽」にかえることもあるが、平成二三年にはそれはなかった。

四番山の諫鼓山は囃子方が「戻り山」を演奏するなか、二時八分に御旅所を出発した。途中「戻り山」のテンポが上がり、曳行のスピードも上がった。徐々に雰囲気盛り上がってきて、「戻り山」の途中に入る「チョイナ」という合の手を「ヨイサ」や「諫鼓」にして遊ぶ。合の手ときには提灯を持ちあげて雰囲気さらに盛り上げる。山蔵に入れるときは若い衆が「ソレ！ソレ！」と急かすような掛け声を上げる。二三時一七分曳山が山蔵に納められると、囃子方は落着きの曲として「奉演間」を一段吹く。囃子方は最後まで吹き終えると、喜びの声を上げたり、ハイタッチなどをして喜び合っていた。

第一七項 御幣返し

御幣返しの儀は、四月一七日に八幡宮へ御幣を返す行事である。午前八時までに各山組は八幡宮に到着し、幣殿にて御幣を本殿に返納する。返納した順に自町に戻る。



戻り山(月宮殿) 町内に戻る(平成23年4月15日 21:56 撮影)



戻り山(諫鼓山) 曳山の後ろでシャギリをする囃子方。学校帰りの子もいる(平成23年4月15日 22:16 撮影)